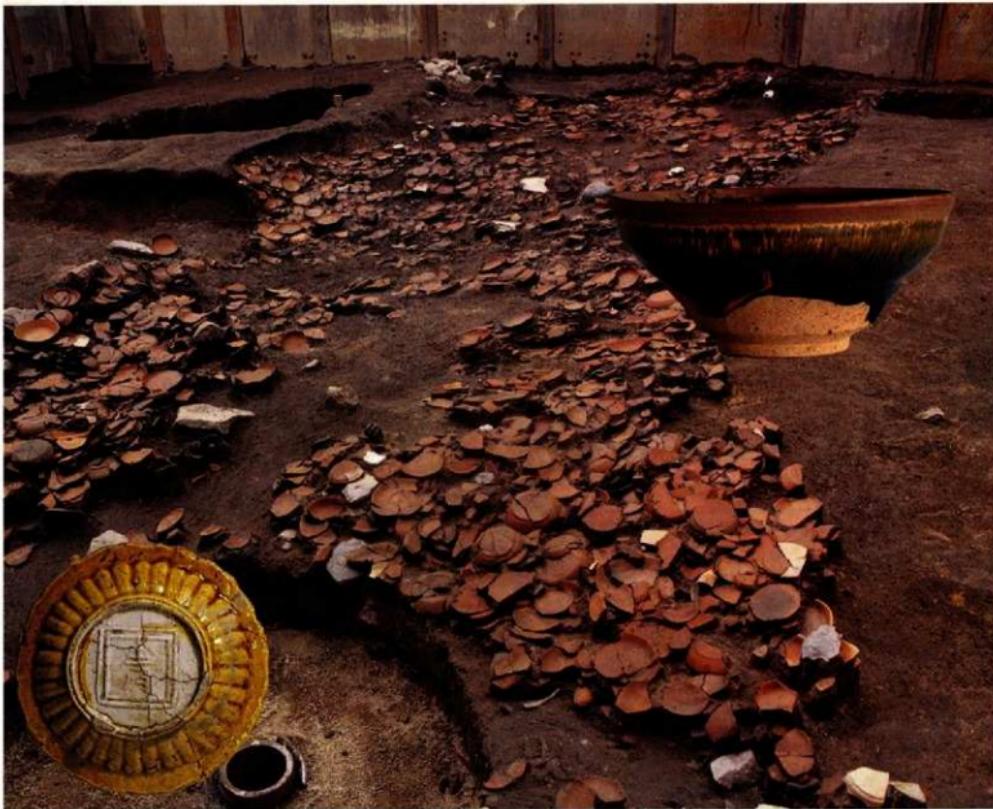


博 多 75

— 博多遺跡群第118次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第666集



2001

福岡市教育委員会

博多 75

— 博多遺跡群第118次調査の概要 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第666集



調査番号 9927
遺跡略号 HKT-118

2001

福岡市教育委員会

序

福岡市博多区の北側、JR博多駅から博多港にかけての都心部の地下には、博多遺跡群が眠っています。博多遺跡群は、古代から中世を通じて、東アジア、とりわけ中国・朝鮮との貿易で繁栄した、都市遺跡です。政治性の希薄な、商業的かつ国際的な都市という点では、わが国では希有な遺跡であり、アジアの拠点都市をめざす現在の福岡市の原点と言うこともできるでしょう。

しかし、残念なことには、現在の都心部にあたるため、種々の開発行為による遺跡破壊は避けられません。福岡市教育委員会では、昭和57年以降、必要に応じて発掘調査を実施して、これに対応してまいりました。本書は、その第118次調査の成果を報告するものです。

第118次調査では、奈良時代から近現代にいたるさまざまな遺構・遺物を検出しました。特に、14世紀前半の溝に一括廃棄された大量のかわらけについては、この地で行われた饗宴の名残と考えられ、あるいは鎮西探題館の一端を示すものかと注目を集めるなど、多くの貴重な成果が上がりました。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理、報告まで、さまざまな面でご理解とご協力をいただいた株式会社山家屋柴田裕一郎氏ならびに清水建設株式会社をはじめとする多くの方々に、心から感謝を表します。

平成十三年三月三〇日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

1. 本章は、共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した博多遺跡群第118次調査（福岡市博多区冷泉町88-1）の概要報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大浜菜緒、佐藤信、大庭、阿部泰之が作成した。また、製図には、大庭智子があたった。
4. 本章の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準している。
5. 本章に使用した遺物実測図は、森本朝子・井上涼子・大浜菜緒・大庭康時が作成し、森本・井上・大浜・萩尾朱美・森若知子・大庭が製図した。
6. 本調査で出土した銅鏡は、大庭智子が銷落とし・判読し、拓本を作成した。その他の金属製品についても、同様である。
7. 本章で報告する遺物については、遺構ごとに通し番号をつけて記述した。
8. 本調査にかかわる遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
9. 本書にかかわる遺物および記録類の整理には、今井民代・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・上塘貴代子があたった。
10. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9927	遺跡略号	HKT-118
調査地地番	博多区冷泉町88-1	分布地図番号	天神49
開発面積	201m ²	調査面積	200m ²
調査期間	1999年7月13日～9月30日		

本文目次

第一章 はじめに	1		
1. 調査にいたる経過	1		
2. 発掘調査の組織と構成	1		
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2		
4. 周辺での発掘調査	4		
第二章 発掘調査の記録	5		
1. 発掘調査の方法	5		
2. 遺構と遺物	6		
(1) 第1面	6		
024号遺構	9	219号遺構	19
221号遺構	21	239号遺構	25
253号遺構	26		
(2) 第2面	27		
030号遺構	30	032号遺構	30
034号遺構	31	044号遺構	33
054号遺構	33	064号遺構	34
071号遺構	36	114号遺構	38
118号遺構 (=107号遺構)	39	269号遺構	44
318号遺構	46		
(3) 第3面	48		
133号遺構	51	140号遺構	51
142号遺構	53	180号遺構	54
194号遺構	54	198・199・200号遺構	55
331号遺構	56	332号遺構	58
333号遺構	59	334号遺構	60
335号遺構	60	342号遺構	62
353号遺構	62		
(4) その他の出土遺物	66		
弥生土器	66	古代遺物	67
中世国産陶器	69	中世貿易陶磁器	69
銅錢	70		
第三章 まとめ	72		
発掘調査の概要	72		
024号遺構について	73		
024号遺構出土の土師器皿について	73		
黄釉磁器小皿について	73		
118次調査地点と鎮西探題館	73		

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経過

平成10年10月30日、柴田裕一郎より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区冷泉88-1に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。申請地は、中世以来対外貿易で栄えた「博多」＝博多遺跡群の範囲に含まれていた。また、周辺でもこれまでたびたび発掘調査が実施されており、遺跡の存在は容易に推定できた。そこで、埋蔵文化財課では、まず試掘調査が必要と判断し、翌11月26日試掘調査を実施した。

試掘調査では、現地表下150cmまでが近世・近代の包含層であり、以下に中世の遺構が遺存しているのを確認した。その上で、申請された工事用途はビル建設であり、その場合には発掘調査は避けられない旨が報告された。

こうして、発掘調査を前提とした協議が開始され、平成11年5月に施工業者が清水建設に決定し、具体的な工程の詰めに入った。6月18日には現地での協議を行い、準備工事である矢板打ち込み表土掘削・搬出の日程を決定した。25日には業者より工程表が出され、7月10日以降に発掘調査に着手することとなった。

発掘調査には、大庭康時が当たる事となり、7月1日からの清水建設による矢板工事・表土除去を経て13日に調査機材を搬入、翌14日より調査作業にとりかかった。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	柴田裕一郎		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	西憲一郎（前任）
調査総括	同		生田征生（現任）
	同	埋蔵文化財課 課長	柳田純孝
調査指導	九州大学 佐伯弘次（国史学）	第二係長	力式卓二
調査庶務	同	第一係	谷口真由美（前任）
			御手洗清（現任）
調査担当	同	第二係	大庭康時
調査補助	佐藤信 大浜菜緒		
調査作業	石川君子 井口正愛 江越初代 大久保学 大庭智子 川崎良 清水明 関加代子 曽根崎昭子 都野浩之 永隈和代 長田嘉造 沼田昌信 能丸勢津子 野口ミヨ 早川浩 宮崎タマ子 村崎祐子 森垣隆祝 山内恵 吉田清 吉田昌敏		

このほか、発掘作業に関わる諸条件の整備・調査中の便宜については、施主である柴田裕一郎氏、清水建設株式会社九州支店泊輝男氏・富川裕文氏よりご協力をいただいた。記して、謝する次第である。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄海灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開墾された石堂川（御笠川）、南は石堂川開墾以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画される。

この御笠川と那珂川にはさまれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡がならぶ地域でもある。上流側から著名なものをあげると、奴国の中核地であり、奴国王墓も発見された須玖岡本遺跡を中心とする一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が多く出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られる板付遺跡、弥生時代の青銅器鋳造地のひとつである那珂遺跡、弥生時代後期の環濠群や網で巻いた銅劍が発掘より出土した比恵遺跡など、ほぼ直線上にならんでいる。博多遺跡群で調査されている弥生時代中期・後期の集落・豪墳墓群は、これら諸遺跡の延長上で理解できるだろう。さらに、そのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴國王」金印出土遺跡にあたる。弥生時代中期に、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動の拠点集落として位置づけられる。5世紀後半に築かれたとされる博多1号墳（前方後円墳、推定墳丘長60m）も、那珂川右岸に展開する一連の前方後円墳の首長墓の流れの中で考えられよう。6世紀後半には、那の津官が設置される。その推定位置については、福岡市南区三宅が当てられてきたが、1984年比恵遺跡で柵列に囲まれた倉庫群が発見されるによんでこれを官家にあてる説が浮上してきた。同様の、柵列に囲まれた倉庫群は、良区有田・小田部遺跡群でも複数検出されており、その性格・実態についてはいまだ定まった評価をあたえられていないが、これらの地域が、有力な地位を保っていたことを示している。

律令時代にはいると、御笠川の最上流に大宰府がおかれて、九州の政治・軍事的中心地となる。博多湾岸には、博多遺跡群とは入り海ひとつを隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館がおかれた。博多遺跡群に官衙がおかれた記録はないが、石帶・銅製帶金具・墨書き須恵器・須恵器鏡・皇朝錢・鴻臚館式瓦・老司式瓦などが出土しており、律令官人の存在が推定できる。

平安時代後半になって律令体制が弛緩すると、対外貿易も京都の中央政府の直接的掌握から、大宰府を通じての管理へと変質する。これが、大宰府官による蓄財のための私貿易の拡大をもたらしたであろうことは、想像に難くない。こうした流れの中で、11世紀には、博多に宋商人の居留が知られるようになる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半になってからで、膨大な量の輸入陶磁器が出土している。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけて、聖福寺・承天寺の2大禅刹が博多綱首（博多在住宋商人）の後押しの元で、相次いで建立され、急速に都市化が進行したと見ることができる。

鎌倉時代、2度にわたる元寇で博多付近は戦場になるが、13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地というのみではなく、九州の政治的中心地という面も持つにいたる。構造の上では、13世紀末から14世紀初めにかけて、あちこちに道路がつくられており、それらは戦国時代まで続いている。これらの道路は、必ずしも相互に規則性・統一性を持ってはいないが、中世後半を通じての博多の街区・景観はここにつくられたと言えよう。

南北朝時代頃から、博多の海岸部にあたる息浜の勃興・発展が著しく、博多の繁栄の中心は、内陸側の博多浜から、息浜へと移る。息浜商人らは、中国大陆の元・明のみならず、高麗・朝鮮、さらには琉球・東南アジアにまで進出して、貿易を行った。博多遺跡群からは、タイやベトナムの陶磁器が出土しており、これを裏付けている。また、この時代の民間貿易は、海賊である倭寇によって担われ

た一面もあり、博多にも倭寇の存在が記されている。

一方、南北朝時代、足利尊氏によって博多に九州探題がおかれたが、九州では懷良親王をいただく南朝方や、反尊氏である足利直冬の勢力が強く、探題の政治力・軍事力は強力なものとはなりえなかった。歌人としても知られる探題今川了俊のもとでは、南朝勢力は圧倒され、了俊は博多にあって朝鮮貿易などに積極的に乗り出す。しかし、了俊のこのような勢威は、將軍足利義満の不興を買い、了俊は探題の任を解かれ、九州を去る。その後、博多は筑前の少弐氏、豊後の太田氏、周防の大内氏による争奪の対象となった。室町時代後半の博多は、堺とならんで自治都市として著名だが、たびたび兵火にかかるて焼失している。

1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏の軍によって焼かれ、灰塵に帰す。翌年、島津氏を逐って九州平定を遂げた豊臣秀吉は、博多の復興を指示した。これがいわゆる太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以来続いた博多の諸道路、街区は廃される。太閤町割は、それまで町のあちこちで異なっていた道路の方向や街区を統一し、博多全体を長方形街区と短冊型地割りで仕切るものであった。こうして、中世都市博多は近世都市に生まれ変わった。

太閤町割と豊臣秀吉の朝鮮出兵によって、博多は再びよみがえる。しかし、江戸時代にはいり、鎖国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幕をおろした。そして、黒田氏52万石の城下町福岡と対をなす商人町博多として福岡藩の藩都となり、そのまま明治維新を迎えたのである。

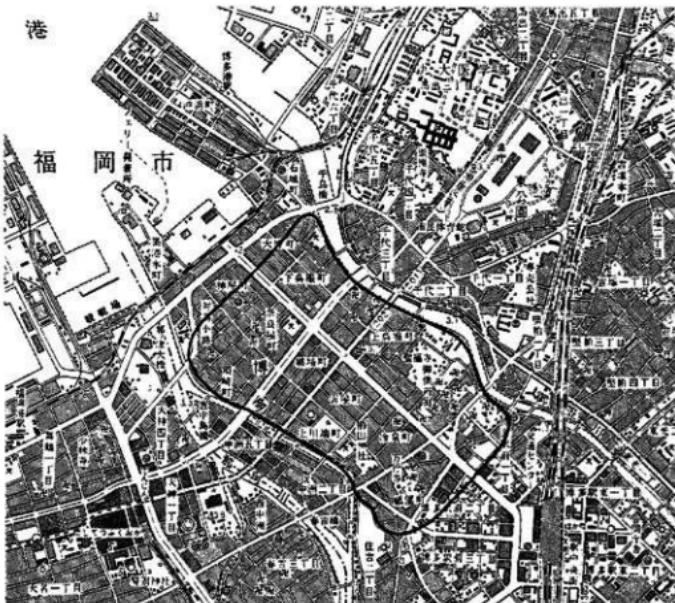


Fig.1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)

4. 周辺での発掘調査

本調査地点周辺でも、数地点で発掘調査が実施されているので、概観しておく。

第3次調査

1979年11月12日～12月17日に実施した発掘調査である。本調査地点とは、固体道路を隔てた、万行寺境内の納骨堂建設に伴うもので、古墳時代から中世に及ぶ遺構が検出された。調査区のほぼ中心を、15世紀代の人溝がほぼ東西に横断している。出土遺物の中心は、12～13世紀にある。

福岡市報第515集、1997年。

第45次調査

1989年3月7日～4月17日・5月16日から6月22日に実施した発掘調査である。やはり万行寺の納骨堂建設に関わる調査で、第3次調査地点の南に隣接する。古墳時代前期から14世紀前半までの遺構・遺物を検出した。12世紀代の中国陶器の鉢に、6巻の銅錢が容れられていたSX3100が注目される。

福岡市報第248集、1991年。

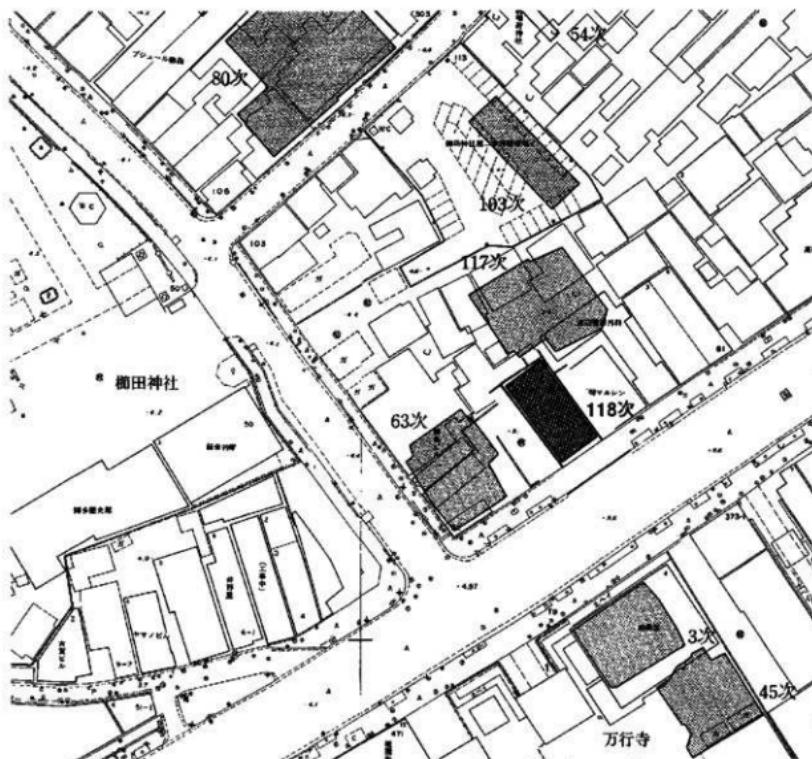


Fig.2 第118次調査地点周辺の既調査区分布図 (1/1,000)

第54次調査

1989年7月10日～7月11日に実施した立会い調査である。開発予定地が狭小であったために、杭打ち後の根切り工事に合わせて立会いを行った。東西方向に伸びる幅3mほどの溝を確認したが、時期は判断できなかった。

福岡市埋蔵文化財年報Vol.4、1991年。

第63次調査

1990年2月13日～4月20日に、本調査地点の西に隣接して実施した発掘調査である。上層部分での搅乱が著しく、13世紀以後の生活面そのものは調査できなかったが、占墳時代前期・奈良時代・中世前半の遺構を検出した。13世紀後半～14世紀前半とされたSK0045からは、埴輪・ふいご羽口・革瓶鋲型などが出土しており、鉄物工房の存在をうかがわせる。

福岡市報第286集、1992年。

第80次調査

1993年5月20日～翌3月31日に実施した発掘調査である。本調査地点からは、北に90mほど離れる。弥生時代後期前半の竪穴住居跡を最古とし、古代から近世に及ぶ遺構を調査している。遺構のピークは12～14世紀にあり、14～15世紀には道路や瓦葺建物の存在等、町として整備された状況をうかがわせる遺構が見られるようになる。14世紀前半の土坑SK48からは、歡喜天像鋲型・取り瓶・銅津・砥石などが出土しており、鉄物工房があった事を示している。

福岡市報第448集、1996年。

第97次調査

1996年4月3日～7月25日に実施した発掘調査である。弥生時代後期から中世の遺構・遺物を検出した。13～14世紀に操業された銅製品の鋳造遺構が検出されたことは、注目される。

福岡市報第500集、1998年。

第103次調査

1997年12月8日～翌2月28日に実施した発掘調査である。狭長な調査区であるが、12世紀後半から16世紀前半にかかる、12条の溝状遺構が検出された。

福岡市報第627集、2000年。

第117次調査

1999年6月7日～9月27日に、本調査地点の北に隣接して実施した発掘調査である。今年度報告書が刊行されるので、調査の内容については、そちらを参照されたい。

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法

発掘調査にあたっては、まず清水建設による矢板打ち込み、表土除去を行った。開発予定地が狭いことから、矢板は対象地全体を一気に囲まず、まず用地奥の半分強について養生し、この部分の調査後、残りの部分を養生・掘削・調査することとした。これによって、便宜上奥側をA区、手前をB区として区別した。A区の調査に際しての掘削による残土は、清水建設の協力で運搬し、廃棄した。B区の残土は搬出せず、A区に積み上げることで処理した。

調査は、表土除去後、遺構検出・精査と人力による掘り下げを繰り返し、3枚の遺構検出面を設定した。遺構検出面の設定にあたっては、井戸・土坑などの断面に現れた土層を参考にしたが、明瞭な整地層は認められず、便宜的な面にとどまっている。

最終的な埋め戻しは、清水建設に任せることとし、調査後残土を均したのみで終了した。

2. 遺構と遺物

今回の発掘調査では、古代の整穴住居跡・土坑、中世の柱穴・土坑・井戸・溝などを調査し、コンテナ224箱分の土器・陶磁器・金属製品などを発見した。以下、主要なものについてその遺構と出土遺物を紹介する。

(1) 第1面

業者のパックホールによる、表土除去後の面を第1面とした。凹凸をなくすことを主に遺構検出を行ったが、一部で灰茶色粘質土を敷いた整地面が見られた。標高は、3.7~3.9mを測る。

近世の大型土坑が多く見られた。これらには、素焼きの陶器片や木炭ガラなどが多く捨てられていた。博多人形を中心とした博多の近世窯業を研究している山村信榮氏によれば、当地点には近代にかけて「素焼き屋」と称される製陶業者がいたとのことで、それを出土資料として裏付けたものといえよう。これら土坑と一緒に廃棄された肥前陶磁器を見ると、022号遺構ではコンニャク印判（18世紀前半）、014号遺構では広東碗（19世紀）、023号遺構ではプリント判（18世紀）と時期を異にして置かれている様子が見て取れ、この場所での製陶が、18世紀以来続いてきたことが窺われる。

中世の遺構では、土師器皿を大量に一括廃棄した遺構が目を引く。024号遺構は、浅い溝中にびっしりと土師器を廃棄している（後述）。202号遺構は、第1面上に集中して土師器を捨てたもので、碎片状態に割れた例が多かった。219号遺構は、浅い土坑状の溜みに土師器を捨てたものである（後述）。時期的には、いずれも14世紀前半と考えられる。

A区は、近世以降の遺構を除けば、極端に遺構密度が薄い。これに対し、B区では密度が濃いとまでは行かないが、土坑・柱穴が目立っている。

第1面の時期は、13世紀~14世紀前半である。



Ph.1 A区 第1面022号遺構遺物出土状況（東より）



Ph.2 第1面全景 (1) A区 南東より (2) B区 北より

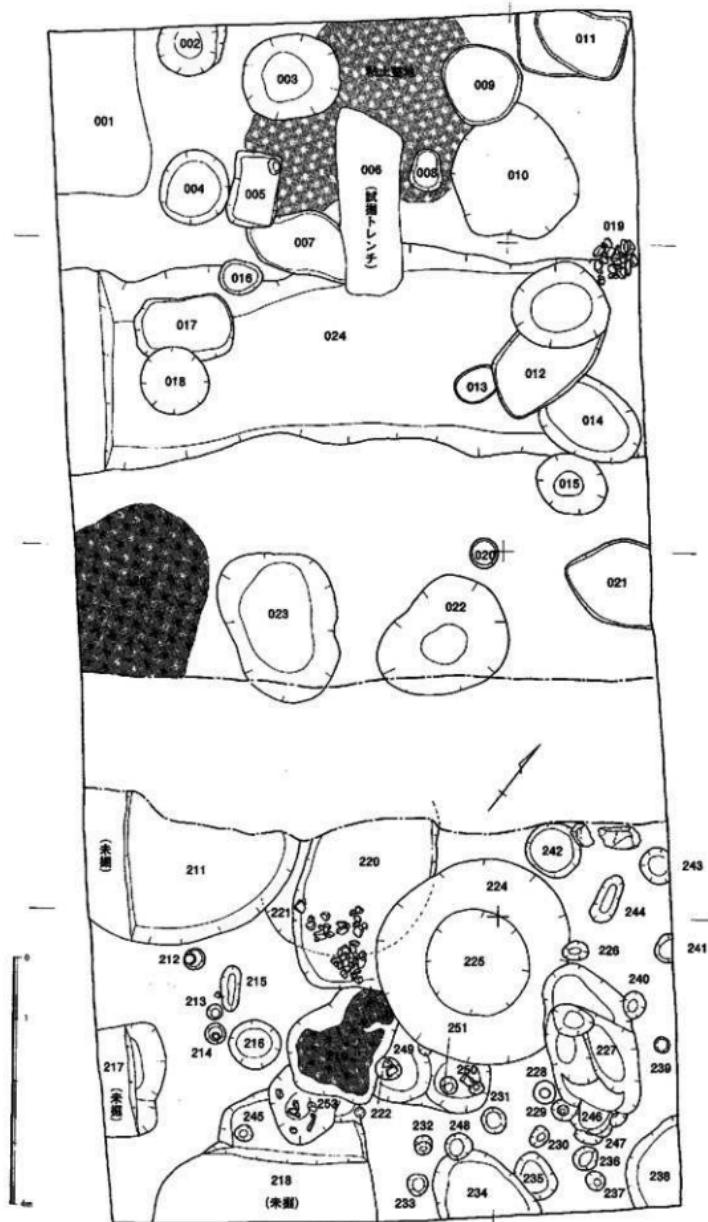


Fig.3 第1面遮構平圖図 (1/80)

024号遺構

第1面A区の中ほどを、北東から南西に横断して検出した溝状遺構である。検出面上での上端幅は3.0~3.2m、深さ24~37cmを測る。両端が調査区の壁に入していくため、全体の規模は知り得ないが、延長約10m分程度を発掘している。溝の断面は浅い箱型をしており、本来はもっと深かったことを予想させる。しかし、第1面よりも上の土については、表土剥ぎの際に重機により除去しているため、確認の仕様がないのであるが、表土掘削に立ち会った時点では、後述するような土師器皿・坏のまとまった出土は見られなかったこと、前節で触れた202号遺構が024号遺構と同時期の所産と考えられることから、さほど掘り飛ばしたものとは思われない。試掘調査のトレッジが、024号遺構を引っ掛けているが、その所見で現地表下150cm（標高4.0m程度）までは近世以降の堆積であるとしていることも、これを支持している。これらの点から判断すると、表土掘削時にさほど大きく削平してしまったとは考えにくく、024号遺構は本来浅くて幅の広い溝であったとするのが妥当であろう。

なお、024号遺構と重複していくつかの土坑が見られるが、いずれも024号遺構を切り込んだもので、近世以後の遺構である。

024号遺構には、大量の上師器皿・坏が廃棄されていた。土師器堆積層の表面を丁寧に検出したところ、土師器は碎片化し、いくつかの分布の群があるように見えた(Ph.3)。一方、024号遺構を切り込んだ土坑の壁面を観察すると、細片化した土師器の下層に完形品を主とした上師器皿・坏が堆積している状況が認められた。そこで、堆積層表面の土師器群を上層、下位の完形品を上とした土師器群を中層、最下部に貼りついた土師器を下層として分別した。

上層の土師器群は、ほぼ全面に分布するものの部分的に堆積上が噛んでいる状況が見られ、すべてが同時に廃棄されたものではないことを示している。とはいっても、その土壤を鍵層として遺物のブロックが分層できるわけではなく、上層の土師器が大部分において中層の土師器群と直に接していることなどを見れば、きわめて短期間に廃棄されたことは間違いないかろう。中層の土師器群は、まったく分別できなほ

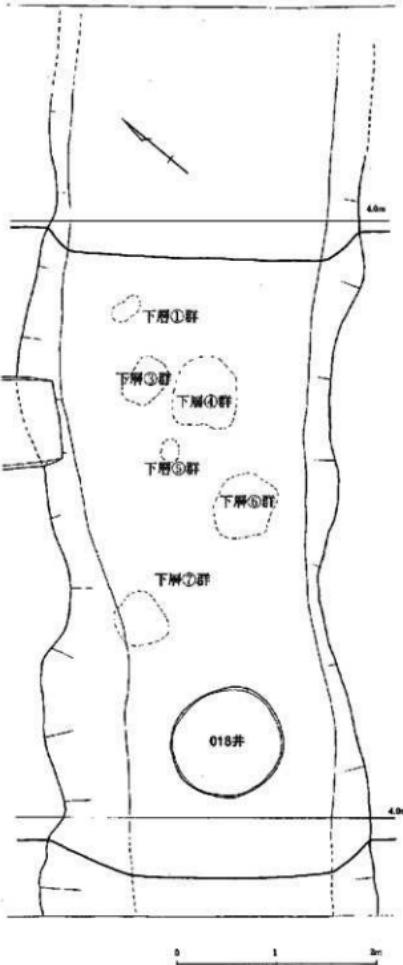


Fig.4 024号遺構実測図 (1/40)



Ph.3 024号遺構 上層

(1) 北東より

(2) 北より





Ph.4 024号遺構 上層土師器堆積状況（北東より）

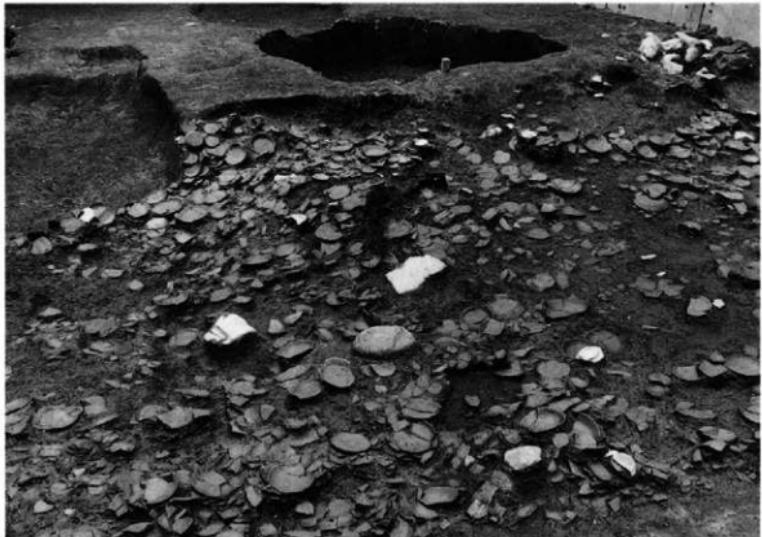


Ph.5 024号遺構 上層からの堆積状況

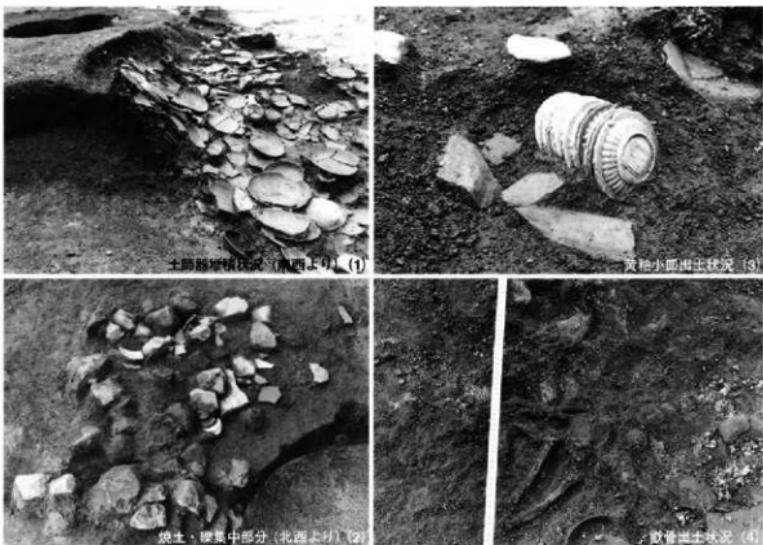


Ph.6 024号遺構 中層
(1) 北東より
(2) 南より

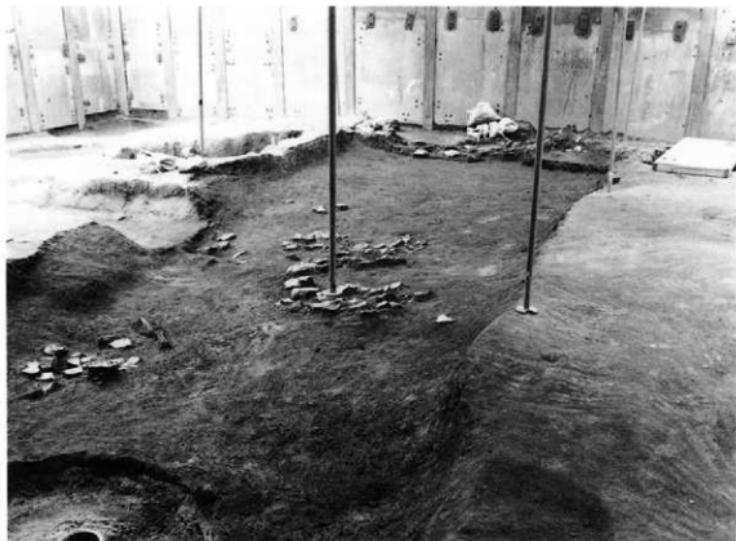




Ph.7 024号遺構 中層土器出土状況（南より）



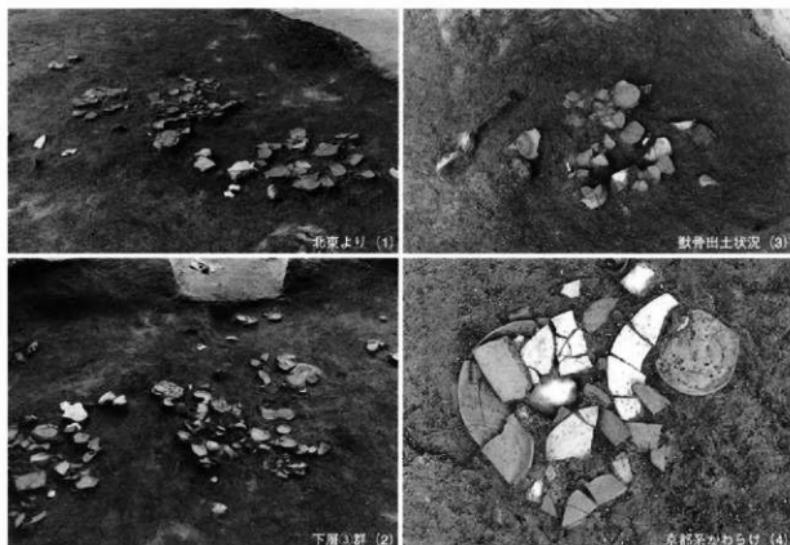
Ph.8 024号遺構 中層遺物出土状況



Ph.9 024号遺構 掘り上げ状況（南西より）



Ph.10 024号遺構 下層土師器分布（北東より）



Ph.11 024号遺構 下層遺物出土状況

どにまとめて出土した(Ph.6)。上層でも認められた傾向だが、土師器群は溝の壁面に沿うように折り重なって出土しており、これは中層において顕著である(Ph.8-(1))。また、中層の北壁際から黄釉の磁器皿が重なって出土した(Ph.8-(3))。この遺物と出土状況については、第三章でとりあげる。

中層の土師器の取り上げ過程で、018号遺構に切られて焼土と礫が集中して出土した。この場で火を焚いた形跡はなく、火所で用いた礫を土込み廃棄したものであろう。また、獸骨も出土した。犬などの小型獸であるが(未鑑定)、埋葬されたものではなく、食用に供された可能性もある。

下層では、6群ほどの小さなまとまりが散在していた。遺物的には、中層・上層との懸隔は見られないが、最初にこの溝状遺構に土師器を廃棄した段階での、投棄の単位を示すものである。

出土遺物をFig.5~7に示す。

1~61は、土師器である。024号遺構から出土した遺物のほとんどは土師器皿で、コンテナ125箱ほどになるが、この土師器皿に関しては整理を終えることはできなかった。完形品の土師器を比較した限りでは、上層・中層・下層で相違は見られず、とりあえず上層を主に無作為に抽出した皿・壺を図示した。1~8は、京都系の手捏ねかわらけで、胎土はきめ細かく、灰白色を呈する。1~3はヘソ皿、4~8は壺である。9~32は小皿である。小皿には、小型で深いタイプ(9・10、口径6.2・7.3cm、器高1.9・2.4cm)、壺を小型にしたような立ち上がりのしっかりしたタイプ(11~14、口径7.0~8.5cm、器高1.45~1.6cm)、扁平で立ち上がりが小さいタイプ(15~32、口径8.1~8.9cm、器高0.8~1.45cm)がある。底部は、すべて回転糸切りする。10は、内底部に十文字の切れ込みを入れており、その交点から焼けはぜたように孔があいている。

33~61は壺である。壺には、やや小さめだが器が高いもの(33~35、口径12.1~12.6cm、器高2.8~2.95cm)、器高が低めなもの(36~52、口径12.0~14.5cm、器高2.3~2.7cm)、大型で浅いもの(53、

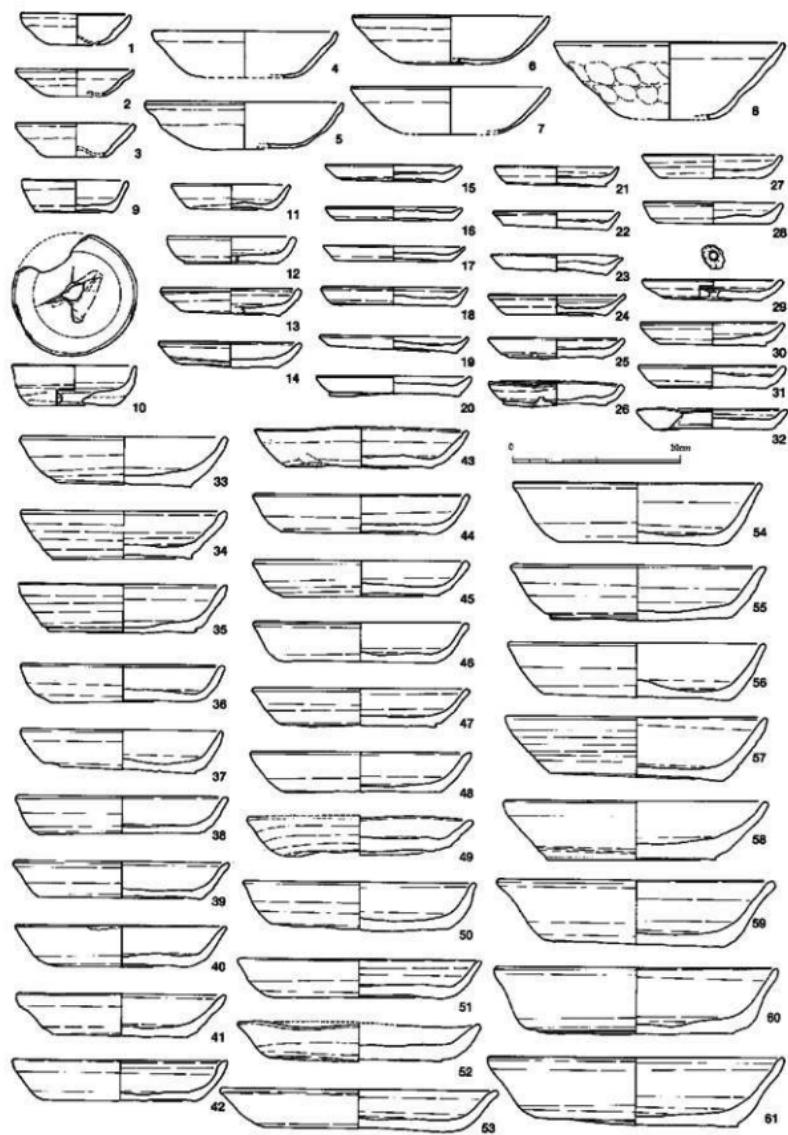


Fig.5 024号漁構出土遺物実測図1 (1/3)

口径16.4cm、器高2.5cm)、大型で器高の高いもの(54~61、口径14.8~17.8cm、器高3.2~4.15cm)の4タイプが見られる。40の口縁部には油煙が付着しており、灯明皿に使われたことがわかる。

62は、瓦器の碗である。分厚い丸底気味の底部に、申し訳程度の貧弱な高台がつく。内面はコテ当てるが、難で凹凸が見られる。全体に作りが粗く、瓦器としては退化した趣を持つ。

63・64は、須恵器である。63は、東播系須恵器の捏ね鉢である。64は、壺の口縁部であろう。

65~74は、黄釉磁器の小皿である。型打ちで、外底部には「青」字の銘を持つ。外面の花弁の数に違いが見られ、30弁(68)、31弁(65・69・74)、32弁(70・71)、34弁(66・67・72・73)となる。銘の「青」字にも、「月」の部分のはらいが外反するものと内渦気味なもの(69・74)があり、これらは型の違

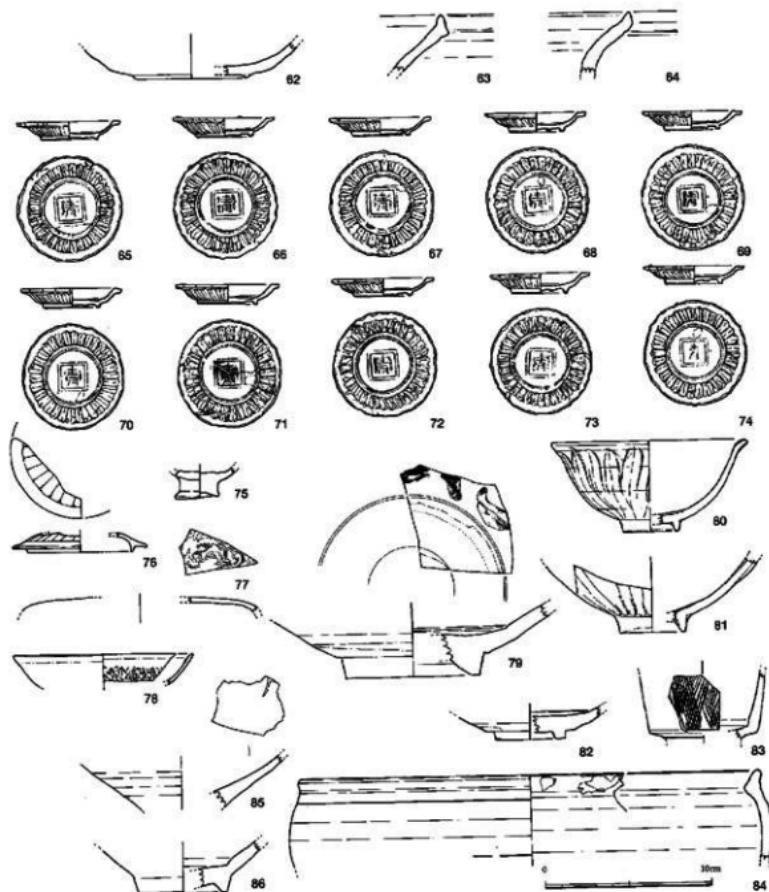


Fig.5 024号遺構出土遺物実測図2 (1/3)

いを示している。釉は黄色を呈し、外底部は露胎である。中層の土器群の端付近から、10枚が重なった状態で出土た。

75・79は、白磁である。75は小盃の破片で、盃内面は施釉されている。79は、鉢である。内面には鉄絵を持つ。高台は露胎で、見込みは輪状に釉を剥いでいる。76～78は、青白磁である。76は小盃の蓋で、上面を花弁状に作る。77は、合子の蓋であろう。上面に印花文を持つ。78は、印花文皿である。口縁は、口禿げとする。

80～83は青磁である。80・81は、疊付を露胎とした碗である。82も碗であるが、外底部を露胎とする。83は、香炉である。外面には、櫛描き沈線で綾杉状の文様を描く。

84は、褐釉陶器の鉢である。内傾した口縁端部には、目跡が見られる。

85・86は、高麗青磁の碗である。85には、ごくわずかではあるが、白土の象嵌が認められる。

87は、須恵器の狼面鏡である。半ば程度を欠くが、大甕の破片を転用したもので、周囲を丸く研磨する。内面は磨耗し、部分的に墨痕が散っている。時期的には、遡るものであろう。

88～90は、石製品である。88・89は硯である。88は、顎と下半を欠く。凝灰岩製。89は、陸から海にかけての破片であるが、縁辺は削りまたは磨っており、転用するための加工途中であったことがわかる。小豆色の凝灰岩を用いる。90は、凝灰岩製の砥石である。大部分が欠損している。

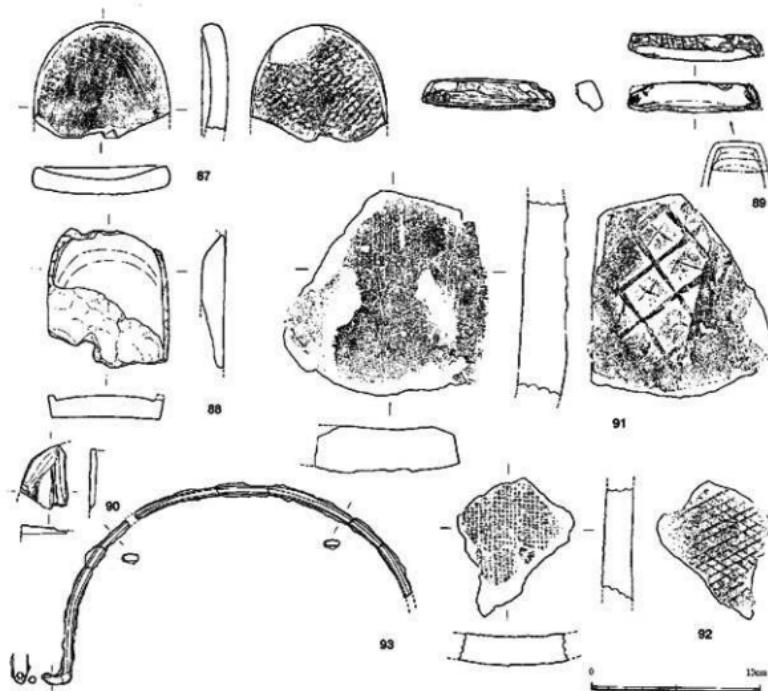
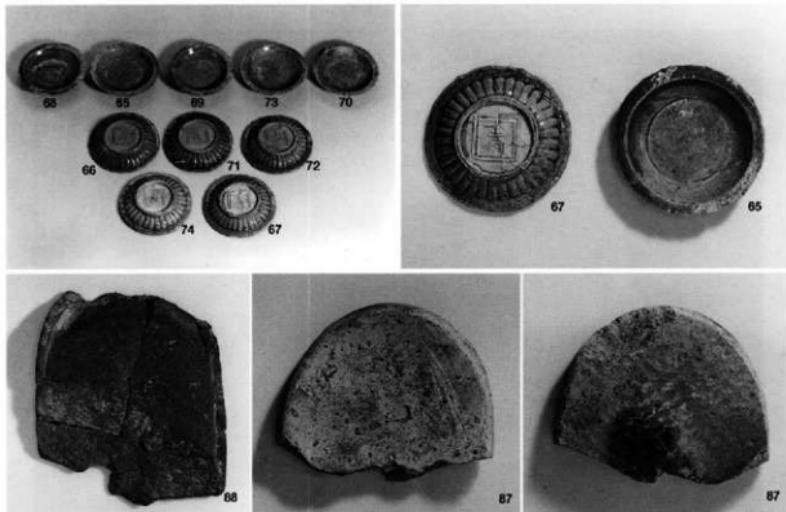


Fig.7 024号遺構出土遺物実測図3 (1/3)



Ph.12 024号遺構出土遺物

91・92は、平瓦片である。須恵質に焼成されている。いずれも古代に遡る遺物である。

93は、鉄製の釣瓶である。圓鍋(=ひさげ?)や鉄鍋につくもので、鍋とすれば、その口径は21cmほどとなる。

これらの遺物から見て、土師器の大量廃棄を14世紀前半とし、溝の掘削時期を13世紀末から14世紀初頭と考えたい。

219号遺構

B区の中程で検出した土坑である。長軸200cm以上、短軸175cmほどの不整形で、深さ8~10cmの浅い皿状を呈する。埋土上面には、破片化した土師器片がびっしりと詰まっていた。完形品の状態を留めるものはほとんどなく、割れた破片を廃棄したものと知れる。

出土遺物の一部をFig.8に示す。1~14は、土師器である。1~5は小皿で、器高が高いもの(1~4、口径6.7~7.4cm、器高1.6~2.0cm)と、低いもの(5、口径7.6cm、器高1.2cm)とがある。実測に耐えない破片が多くいたため図示していないが、器高が低いタイプが圧倒的に多い。5の内面には、油煙が付着している。底部は、すべて回転糸切りする。6~13は、壺である。6~11は、口径12.1~13.0cm、器高2.4~3.7cmを測る。12は、口縁部の小片で、「十」と思われる墨書きをもつ。13は、底部のみの破片である。口径は不明だが遺存部分で15cmを越え、底径は10.1cmを測り、かなり大型の壺である。14は壺の底部で、花押と思われる墨書きが見られる。花押の習字のようだが、筆の流れから見て、実測図とは天地が逆であろう。底部は、回転糸切りである。

15は、楠葉型瓦器である。外面には暗文ではなく、内面にのみ細い暗文がまばらに入る。

この他、青磁・白磁・陶器・石鍋・土人形などが出土している。出土遺物からみて、14世紀前半代の遺構であろう。



Ph.13 219号遺構（南東より）

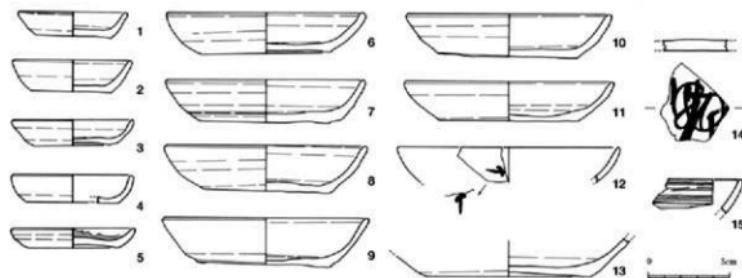
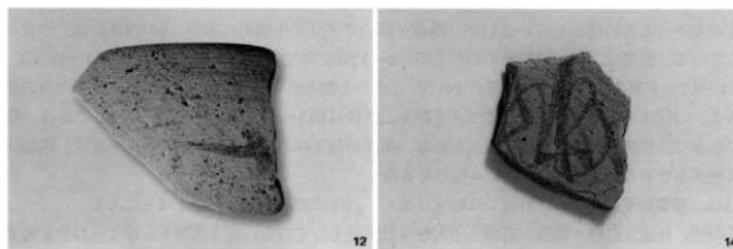


Fig.8 219号遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph.14 219号遺構出土遺物

221号遺構

B区第1面から検出した井戸である。第1面では、211号遺構・220号遺構と重なって全体を知りえなかったが、第2面以下ではほぼその全形が明らかとなった。径320~350cmの掘り方中央に、直径70cmほどの桶を積み上げて井戸側とする。桶は、幅8cm前後の板を並べた結い桶で、最下段の一部(25cmほど)を検出したにすぎない。結い桶の遺存状態は悪く、スponジ状の木質を確認できたのみである。なお、最初に検出した第1面の肩から、井戸側の最下部までは、2.7mほどを測る。

出土遺物をFig. 9~11に示す。

1~22・24~27は、土師器である。1~11は小皿で、口径が小さい割に器高が高いものと(1、口径7.6cm、器高1.2cm)、浅くて扁平なもの(2~11、口径7.0~9.2cm、器0.8~1.3cm)とが見られる。11は、口縁の一部を小さく折り曲げているが、これが全周の中で一ヶ所なのか数カ所になるのかは不明である。なお、底部はすべて回転糸切りである。12~22は、坏である。13~19は、口径12.3~13.1cm、器高2.4~2.7cmをはかる。これに対し、12は口径12.4cm、器高1.85cmとやや浅めであり、20・21は口径



Ph.15 221号遺構 (1) 西より (2) 井戸側、南より

19.5・19.6cm、器高3.6・3.8cmと格段に大きい。底部は、すべて回転糸切りする。22は、器肉の厚さから判断して、壺の底部であろう。墨書きが見られるが、遺存部位からは判読できなかった。24～27は、土鍋である。24は、水平方向に引き出した口縁部の上面に、縄目が押される。25は、半球状の体部から鉗状に折り返した口縁部を持つ。内外面とも、粗い刷毛目調整を行なう。体部外面には、煤が付着している。26は、浅い丸底からほぼ直立する体部を持ち、口縁部は一旦外折した後受け口状に内湾する。外面には厚く煤が付着し、調整痕が見えない。内面は、刷毛目をナデ消している。27は、鉢状に開く体部から緩く外反して口縁を作る。口縁部は横ナデ調整で、外面には厚く煤がこびりついている。

23は、東播系須恵器の捏ね鉢である。小片だが、片口の屈曲部がわずかに残っている。

28～33は、青磁である。28は同安窯系の平底皿で、見込みに櫛描文を持つ。29は、小鉢である。

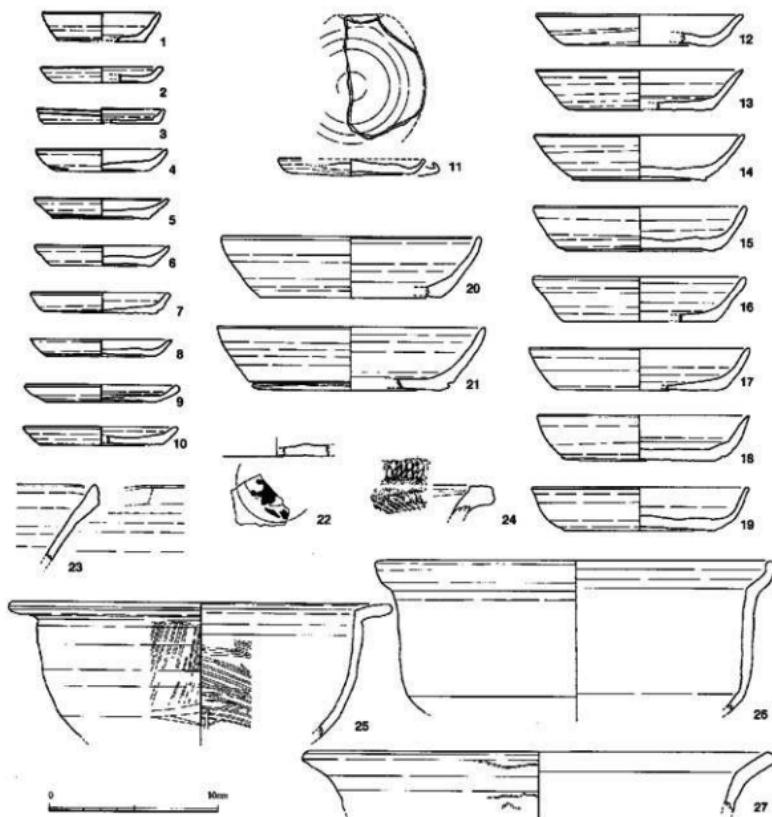


Fig.9 221号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

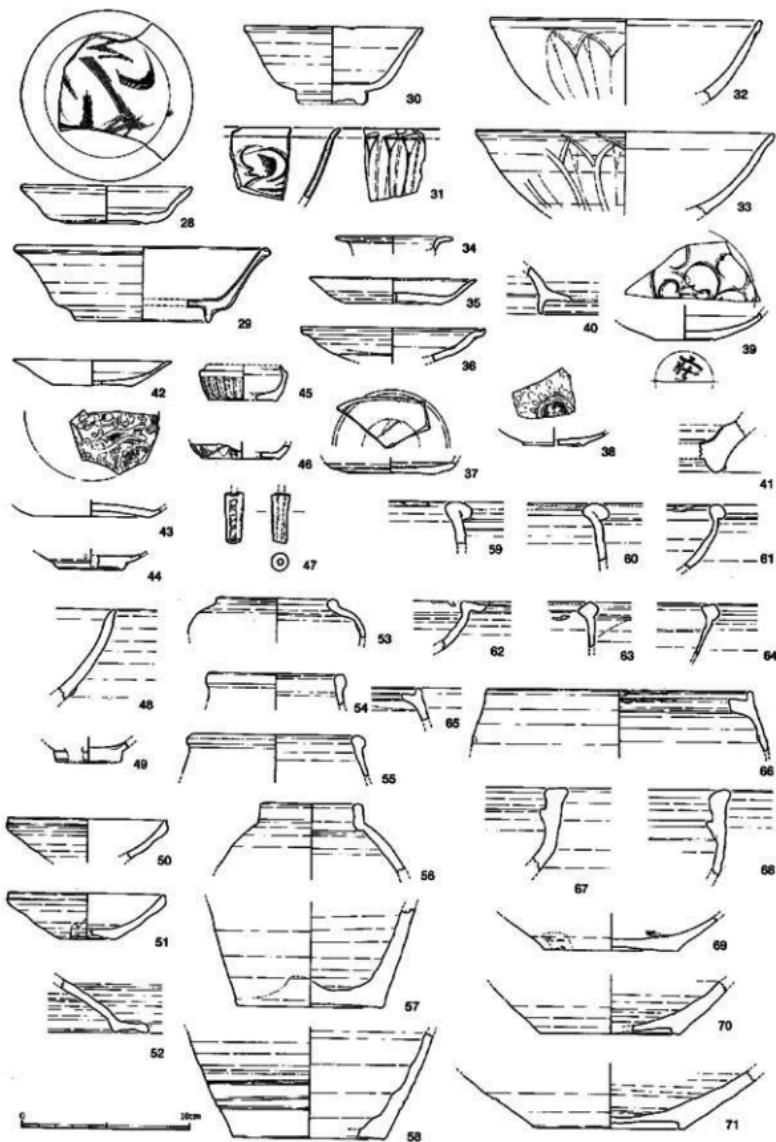


Fig.10 221号墓出土实物图2 (1/3)

全面施釉した後、高台壘坏の釉を剥いで露胎とする。30は、無文の小碗である。高台際まで施釉する。31~33は、鎌蓮弁文の碗である。31は薄手の精品で、内面にも花文が描かれている。

34~41は、白磁である。34は、蓋であろう。口縁端部から外面は、無釉である。35~39は、皿である。35は、口縁部を口禿げとする。36の口縁端部は、小さく受け口状に折り返す。底部を欠くが、おそらく高台が付くものと推測される。37は平底の皿で、見込み中央を丸く釉剥ぎする。38は、白花文の皿である。薄作りで、胎土・釉とともに精品である。39の底部は、施釉後、浅い基底底状に削って

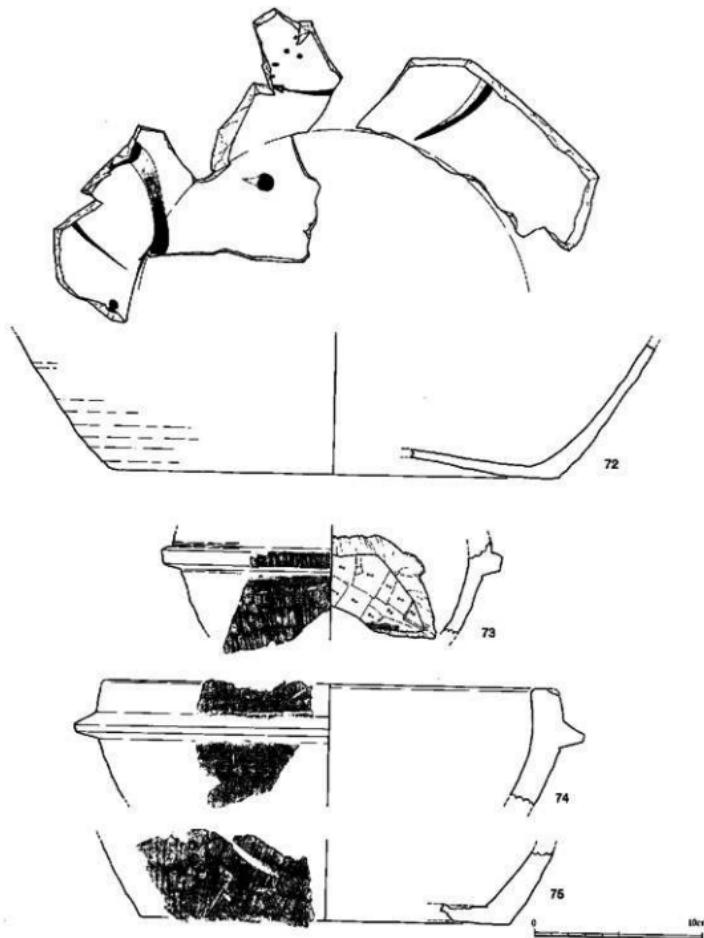


Fig.11 221号造構出土遺物実測図3 (1/3)

いる。見込みには、片切り彫りで花文を描く。外底部には、墨書きが認められる。文字と思われるのだが、判読できない。40は、大型の壺の蓋であろう。鋸の先端から上面にのみ施釉している。41は、瓶の底部である。内面にも釉がかかっている。

42~47は、青白磁である。42~44は皿である。43の見込みには、印花で魚文が描かれている。45~46は、合子である。外面には、印花文が見られる。47は、袋物の脚であろう。

48~72は陶器である。48・49は天目茶碗で、黒釉が施される。48の釉表面には、茶色の禾目が認められる。50・51は、褐釉の平底皿である。52は、大型容器の蓋である。53は、茶壺であろう。さめ細かくきわめて精良な胎土に、茶褐色の釉がかかる。54・55は、壺の口縁であろう。やや内傾した口縁部を玉縁に収め、褐釉を施す。56~58は、褐釉の瓶である。59~64は、褐釉の鉢である。口縁部を玉縁状に作るもの(59~61)、小さく鋸状に折り返すもの(62)、断面四角形に面取りするもの(63・64)などが見られる。いずれも、口縁の上面には、重ね焼きの目痕が付いている。65・66は、褐釉陶器の行平の破片である。口縁上面には、目痕が見られる。67・68は、褐釉陶器の捏鉢である。69~71は、褐釉陶器の底部である。69は鉢、70・71は壺であろう。72は、黄釉鉄絵の鉢である。外面は無釉、内面は黄釉をかけ鐵絵をあしらう。遺存部位が少なく、意匠は不明である。

73~75は、石鍋である。滑石製で、削り痕は明瞭である。外面には、厚く煤が付着している。

このほか、京都系土師器片・瓦質土器壺片・瓦片などが出土している。これらの出土遺物から、221号遺構は、13世紀後半から14世紀前半に掘られ、使われた井戸と考えられる。

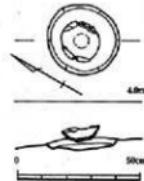


Fig.12 239号遺構実測図
(1/20)

239号遺構

B区の北東壁際から検出した小土坑である。遺構検出時に土師器碗が出土したので、その周囲を精査して土坑掘り方を検出した。土坑は、直径30cm前後、遺構検出面からの深さ5cm程度を測り、そのほぼ中央に若干浮いて土師器碗が据えられていた。

Fig.13-1に、土師器碗を図示する。底部押し出しで丸底にした後、輪高台を貼り付ける。内外とも密に分割へら磨きを施す。12世紀代まで通りうる土師器である。



Fig.13 239号遺構出土遺物実測図
(1/3)



Ph.16 239号遺構 (北西より)



Ph.17 239号遺構出土遺物

253号遺構

B区中程、前述した219号遺構に一部を切られて検出した土坑である。南側の大部分は、218号遺構に切られており、掘り込み面での大きさは不明である。検出できた範囲では、長軸120cm、短軸110cmほどの角が張った楕円形を呈し、第1面から底面までの深さは85cm前後を計る。

出土遺物をFig.14に図示する。1~5は、土器器である。1は、小片のためはっきりしない部分があるが、形態的には搬入土器系として大過なからう。2は、小皿である。口径8.6cm、器高1.4cm。3・4は壊で、口径12.1・13.0cm、器高3.0・2.7cmをはかる。5は、大型の壊である。口径16.2cm、器高3.8cm。これらの土器器は、すべて底部を回転糸切りしている。

6は、東播系須恵器の捏鉢である。外傾した口縁端面は、帯状に黒化する。

7は、白磁である。口縁部のみの破片だが、平底の口禿げ皿であろう。

8は、備前焼の壺である。須恵質の焼成で灰色を呈するが、器面には強いテリがついている。

このほか、天目茶碗の破片などが出土している。13世紀後半から14世紀前半の土坑であろう。



Ph.18 253号遺構 (南東より)

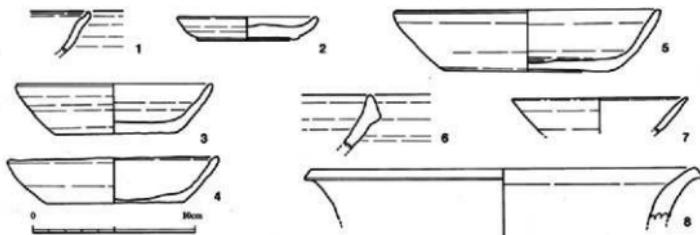
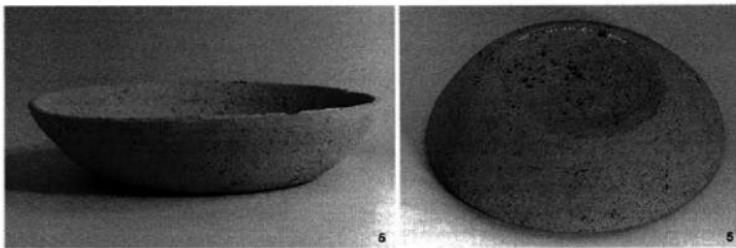


Fig.14 253号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.19 253号遺構出土遺物

(2) 第2面

標高3.4～3.6mで設定した遺構検出面である。土質的には、壤土質から砂質に変わるので指標として設定している。

第2面では、第1面とは異なり、A区・B区のほぼ全面に柱穴が分布している。柱穴には、根石を沈めるものもあるが稀で、獨立柱建物がまとまる状況ではない。柱痕跡を留めるものもあり、それから見て、直径12cm、14cm、22cm等の柱材が復元できる。

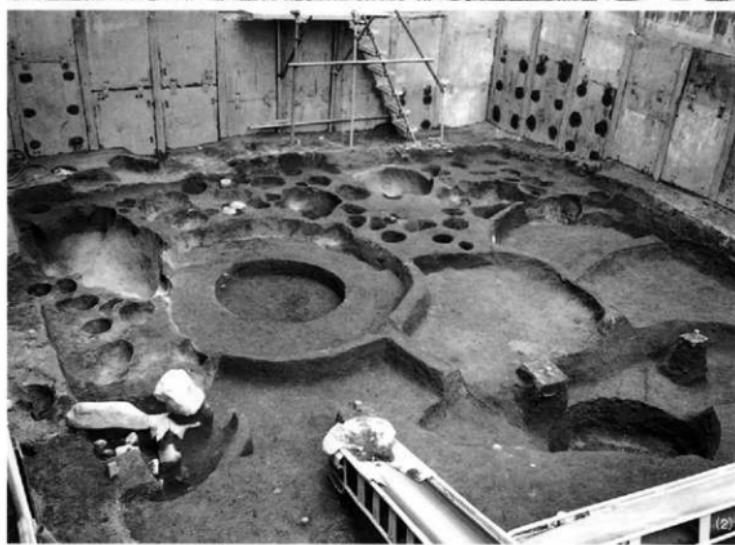
土坑は主としてごみ穴と考えられるが、多量の遺物を廃棄したものも少なくない。また、多様な遺物が出土しており、本文とは重複するが、列記しておく。030号遺構一天目茶碗（完形品）、054号遺構一皇朝錢（隆平永寶）、060号遺構一須恵器円面鏡、071号遺構一12世紀前半一括廃棄、118号遺構一11世紀後半一括廃棄。

次に、第2面で検出した遺構の内、時期比定が可能なものを列記する。A区：034号遺構一12世紀中頃、054号遺構一9世紀、060号遺構一12世紀後半、062号遺構一12世紀後半、063号遺構一12世紀後半、064号遺構一11世紀後半、071号遺構一12世紀中頃、072号遺構一8世紀後半、103号遺構一11世紀後半、114号遺構一12世紀中頃、118号遺構一11世紀後半、125号遺構一12世紀後半、B区：264号遺構一12世紀前半、269号遺構一12世紀中頃、316号遺構一14世紀前半、318号遺構一12世紀前半などである。

これらの状況から見ると、第2面は一部で古い遺構が見られるものの、おおむね11世紀後半から12世紀後半にかけての遺構検出面と考えることができよう。



Ph.20 A区第2面（北東より）



Ph.21 第2面全景 (1) A区、南東より (2) B区、北より

(2)

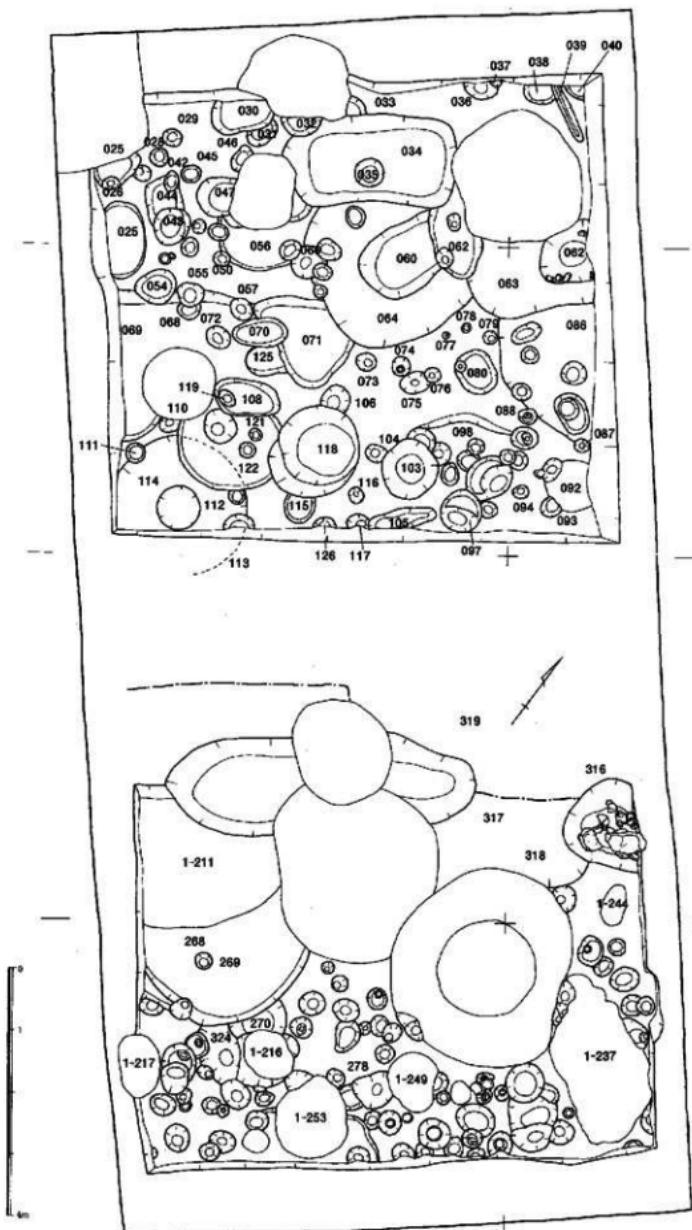


Fig.15 第2面造構平面図 (1/80)

030号遺構

A区北西壁際より検出した土坑である。一部調査区の壁に隠れるのと、第1面の003号遺構に切られているが、全形を推定する妨げにはならない。若干の復元が許されれば、長軸100cm、短軸65cmの小判形を呈し、第2面からの深さは22~26cmを測る。

第2面の遺構検出作業段階に、埋土上面から、ほぼ完形の天目茶碗が出土している。

出土遺物の内、実測に耐えたものをFig.17に図示する。1・2は、土師器の小皿である。口径8.7~8.8cm、器高1.3~1.1cmを測る。底部は、回転糸切りである。

3は、白磁の碗である。腰が張った深碗型で、口縁端部を欠くが、おそらくわずかに外反するものと思われる。高台は高く直立し、見込みの茶溜りは広く浅い。いわゆる、広東系の白磁である。

4は、天目茶碗である(巻頭図版1)。口縁の一部を欠くが、ほぼ完形品と言える。黒釉に褐色の禾目が入り、一部に兔毫がでている。

この他、墨書須恵器(Fig.60-15)などが出土している。
13世紀頃の土坑である。

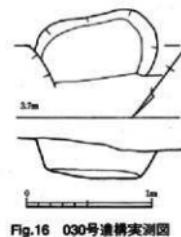


Fig.16 030号遺構実測図
(1/40)



Ph.22 030号遺構 (北西より)

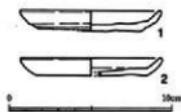


Fig.17 030号遺構出土遺物実測図 (1/3)

032号遺構

A区北西壁際より検出した土坑である。第1面の003号遺構に切られ、半ば以上を失っている。遺存部分から、直径75cmほどの円形を呈すると推測され、遺構検出面からの深さは、20cmを測る。

埋土中から若干の遺物と礫が出土したが、埋置された状況ではなく、廃棄されたものであろう。

出土遺物をFig.19に示す。1は、土師器の高台壺である。高台端部を欠くが、完形品に近い。大型の壺に、高台を貼り付けた形を取る。高台は、「ハ」字型に高く踏ん張る。壺部分は、口径18.0cm、底径10.4cmで、器高4.5cmを測る。



Ph.23 032号遺構 (北西より)

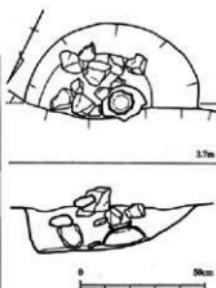


Fig.18 032号遺構実測図
(1/20)

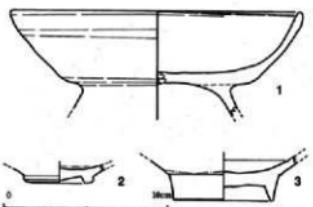


Fig.19 032号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.24 032号遺構出土遺物

2・3は、白磁である。2は、高台付きの皿である。外底部露胎で、見込みには、輪状の釉剥ぎが見られる。3は、碗である。高台は、細く直立する。見込みには、圈線がめぐる。高台際まで施釉し、外底部は露胎となる。

この他、底部糸切りの土師器片、陶器破片などが出土している。おおむね、13世紀頃の土坑と考えれば大過なかろう。

034号遺構

A区の中程から検出した大型の土坑である。長辺2.3m、短辺1.3mの隅丸長方形を呈し、遺構検出面から床面までの深さは、38~50cmをはかる。北辺と東辺はほぼ直立するが、他の二辺は緩傾斜で、立ち上がる。床面は北東側でやや深くなるが、この部分についてはやや掘りすぎた感があり、本来はほぼ平坦であったとみて大過なかろう。

出土遺物の一部をFig.21に示す。

1・2は、土師器である。1は小

皿で、口径9.0cm、器高0.9cmをはかる。底部は、へら切りされる。2は、丸底坏または椀である。底部押し出しで丸底につくるが、底部を欠くため坏と椀の判別ができない。内面は、平滑に撫でられている。3は、瓦器碗である。在地産の、いわゆる筑前型瓦器で、内底部には、幅の広い範磨きが

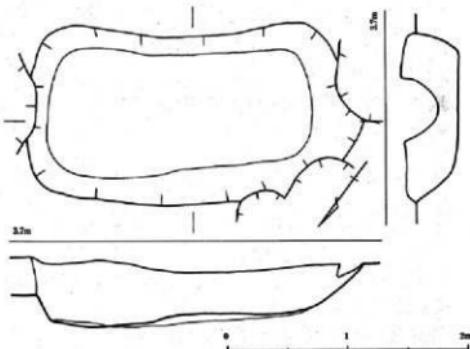


Fig.20 034号遺構実測図 (1/40)



Fig.25 034号遺構 (北西より)

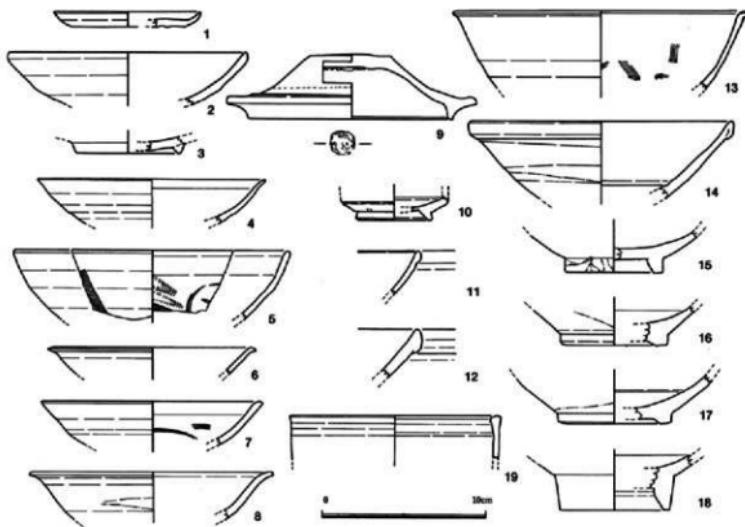


Fig.21 034号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.26 034号遺構出土遺物

認められる。

4は、高麗青磁の碗である。胎土はきめ細かく、良質である。濃青褐色の釉がかかる。造りは薄く、精品と言える。

5は、同安窯系青磁の碗である。外面には櫛描き沈線が垂下、内面には櫛描きの雷光文と片切り彫りの花文があしらわれる。

6~8・10~18は、白磁の碗である。13の内面には、櫛描き文が見られる。10は、香炉の底部であろう。内面には、釉がかかっていない。

9・19は、陶器である。9は、無釉の蓋である。天井部の内面中央には、円形に胎土が貼り付いている。なんのための貼り付けか、不明である。笠部分の中程やや下には、重ね焼きの痕跡がめぐっている。当初、この付着をつまみと見て、実測図とは天地逆の蓋とする可能性もあったが、口縁端部の身

受けの位置から上下を判断した。19は、褐釉陶器である。鉢であろうか。

この他、土師器(底部系切り)・天目茶碗・連江窯系青磁・石鍋などが出土している。12世紀中頃の土坑であろう。

044号遺構

A区西辺から検出した土坑である。短径62cm、長径75cm程度(推定)、遺構検出面からの深さは24cmをはかる。床面から壁面までは焼けており、床面の焼土は砂質土と炭粒の堆積で、4~7cm程の厚さで溜まっていた。

土師器(底部へら切り)・瓦器・白磁・陶器などが出土している。11世紀後半の土坑である。

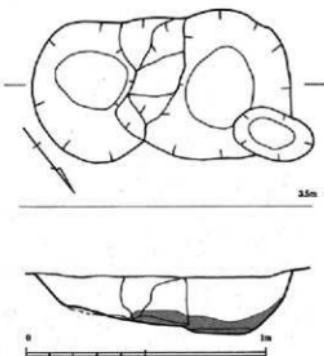
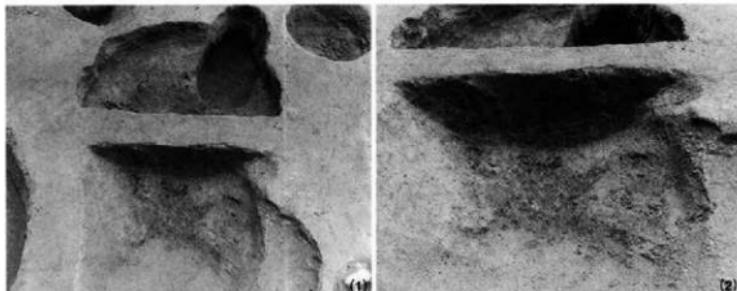


Fig.22 044号遺構実測図 (1/20)



Ph.27 044号遺構 (1) 中位焼成面 (南東より) (2) 焼成面断面 (南東より)

054号遺構

A区西辺近くから検出した小土坑である。長軸65cm、短軸57cmの卵型を呈し、深さ38cmをはかる。埋土から「隆平永寶」(皇朝錢、延暦15年=796)1枚が出土した。遺存状態は良好である。そのほか、須恵器片・土師器片が出土している。9世紀前半頃の遺構であろう。

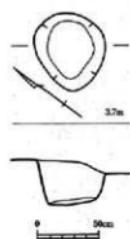


Fig.23 054号遺構実測図 (1/40) - 遺物拓本 (1/1)



Ph.28 054号遺構 (南東より)

064号遺構

A区のほぼ中央から検出した井戸である。第2面では、掘り方の一部を調査したにとどまる。直径2.6m前後の掘り方を持つ略円形で、第2面から底面までの深さは230cmをはかる。掘り方の中央には、直径約60cmの結い桶をおいて、井戸側とする。

出土遺物をFig.25に示す。1~6は、土師器である。1~3は、小皿である。口径9.2~9.8cm、器高1.3~1.6cmをはかる。底部は、へら切りする。4・5は、壺である。底部押し出しで、丸底に作る。内面には、こてを当てて平滑に仕上げる。口径15.0・15.7cm、器高3.5・3.9cm。底部へら切りである。6は、椀である。内外面には、密にへら磨きを加える。

7は、青白磁の小碗である。口縁部は、外側から押して、輪花に作る。

8~23は、白磁である。8は、小壺である。9~21は、碗である。11は小碗であるが、高台内に花押を墨書きしている。22は、水注の注口である。23は、四耳壺の底部である。高台の疊付きから内側は、露胎である。

24・25は、遠江窯系青磁の小碗である。外面の体部下位は、露胎となる。施文はない。

26・27は、黄褐釉陶器の壺である。26の外底部には、へら書き文字「及」がみられる。

黒色土器A類椀・同B類椀・瓦などが出土している。11世紀後半の井戸であろう。

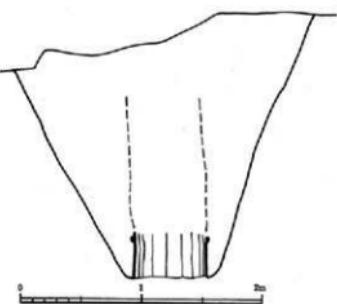
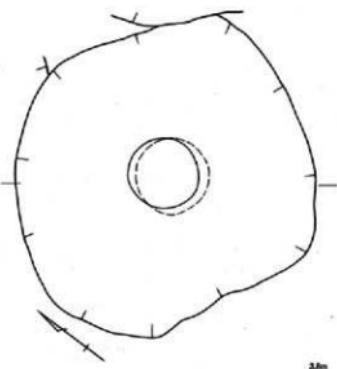


Fig.24 064号遺構実測図 (1/40)



Ph.29 064号遺構 (北より)

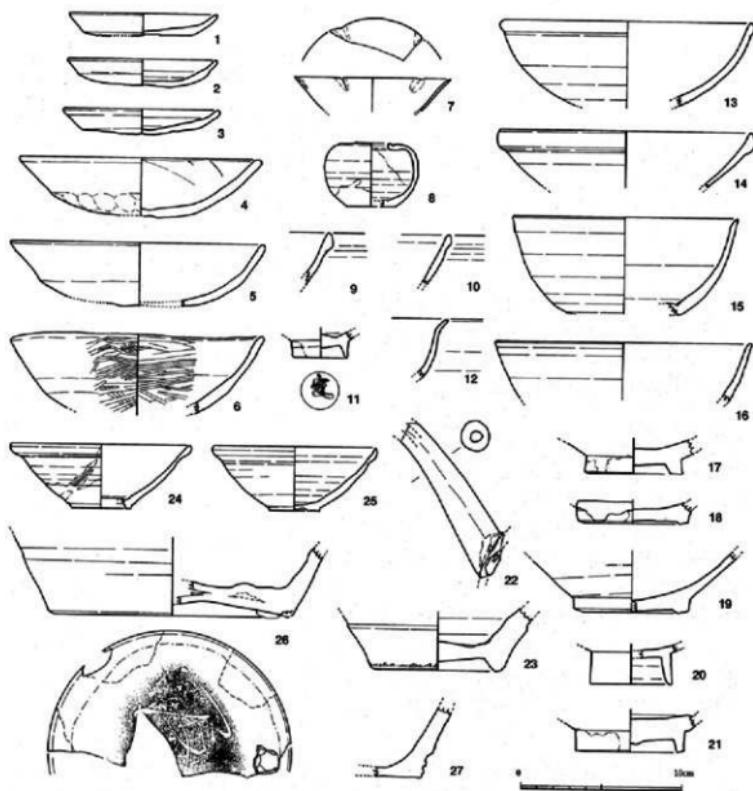
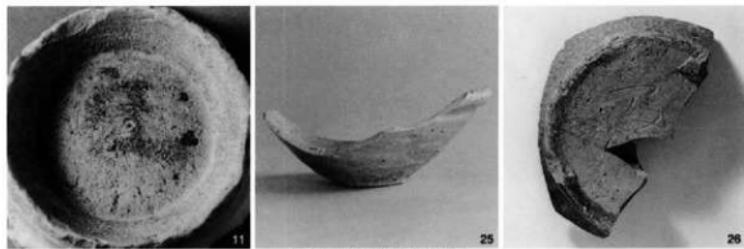


Fig.25 064号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.30 064号遺構出土遺物

071号遺構

A区の中央部から検出した土坑である。前述した064号遺構を切る。一辺160cmの三角形を呈する。遺構検出面からの深さは、20~38cmをはかる。

埋土の上面から中程にかけて、須恵器甕を主とした遺物が出土した。須恵器甕片は、ばらばらの状態で、散在していたが、同一個体である。部位が判断できない破片もあるが、一見したところでは胴部下位の破片は含まれていないようである(少なくとも底部片は見られなかった)。

出土遺物の一部をFig.27に図示する。1・2は、土師器である。1は、小皿である。口径7.8cm、器高1.1cmをはかる。回転系切りである。2は、壺である。内面は、こて当てもしくはなでで平滑に仕上げる。口径15.9cm、器高2.9cmである。

4は、高麗青磁の碗である。肌理はやや粗いが、粗雑な感はない。見込みと疊付きには、重ね焼きの目痕が残る。

3は、連江窯系青磁の小碗である。外面は、体部の中程までしか施釉されていない。見込みには、片切り彫りで花文を描く。

5~8は、白磁である。5・6は、浅碗である。5の内面には、沈線で花文を描く。広東系の白磁である。6の内面には、櫛書き文が見られる。7・8は、碗である。広口の碗で、見込みの周間に

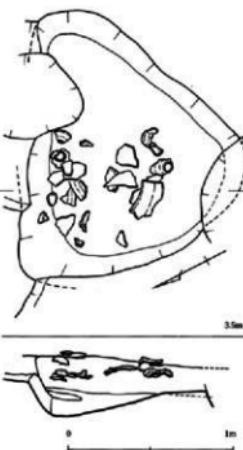


Fig.26 071号遺構実測図 (1/30)



Ph.31 071号遺構（南東より）

は、圓線が巡る。

9は、須恵器の甕である。口縁部は横なで、体部外面は格子目印きで、内面は印き痕跡をなで消している。焼成は、やや瓦質がかっている。口縁部内面には、へら記号が二ヶ所見られる。一方のへら記号は、他方とは違ひ、文字のように見えるが、ちょうど欠損部分にかかるため、判断はできない。Ph.32-9に接合できた破片の一部を示す。

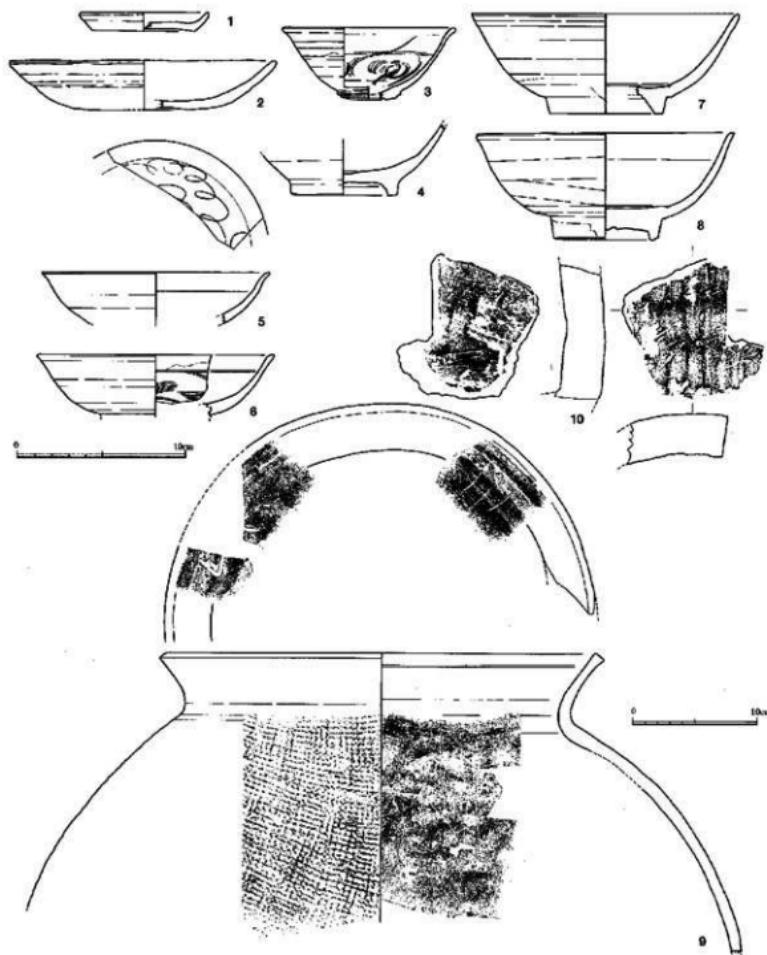


Fig.27 071号遺構出土遺物実測図 (1/3・1/4)



Ph.32 071号遺構出土遺物

10は、石鍋の破片である。滑石製。体部下端の破片で、縦に切り込みを加えられており、転用のための加工途中である事がわかる。

このほか、同安窯系青磁破片・陶器破片なども出土している。12世紀中頃の廐棄土坑と考えるのが妥当であろう。

114号遺構

A区の南角から検出した井戸である。直徑245cm前後の円形の掘り方を持ち、掘り方の北に偏して、井戸側を設ける。井戸側は、底を抜いた結い桶を伏せたもので、長径72cm、短径62cmの楕円形を呈する。井戸側の遺存状態は悪く、スponジ状の木質を検出したにとどまる。

出土遺物の一部を、Fig.29に図示する。

1～5は、白磁である。1は小壺、2は皿、3～5は碗である。2は、底部の縁を小さく削りだして、高台状に作る。高台内は、露胎とする。3・4は、口縁部を小さな玉縁を作る、いわゆるⅡ類碗である。5は、Ⅱ類碗の底部である。体部下位まで施釉しており、白化粧がなされている。

6は、白釉黒花陶器である。盃托の鋲部分にあたる。上面には、鉄絵で巴様の模様を描く。下面は、露胎である。

7は、青白磁の皿である。見込みには圓線が巡る。

8は、越州窯系青磁の小碗である。内面には、印花

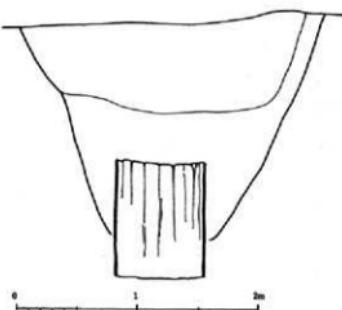
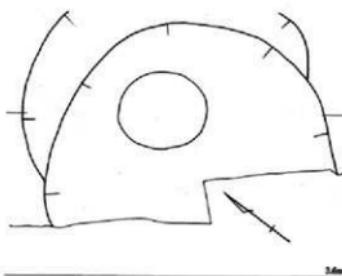


Fig.28 114号遺構実測図 (1/40)



Ph.33 114号造構（南西より）

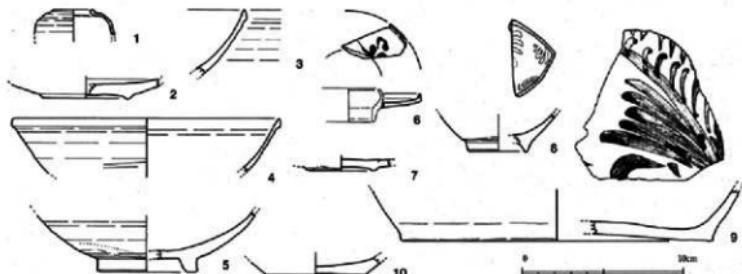


Fig.29 114号造構出土遺物実測図（1/3）

文を持つ。総軸で、高台際に目痕が付く。

9・10は、陶器である。9は、黄釉鉄絵の盤である。

10は、内面に黒褐釉をかける。鉢であろうか。

この他、土師器(へら切り・糸切り)・同安窯系青磁などが出土した。12世紀中頃の井戸であろう。

118号造構(=107号造構)

A区南東壁近くで検出した土坑である。直径110～115cmの円形を呈し、深さは、207cmをはかる。土坑の側壁は、やや巾着状にえぐり込んでいる。床面は平坦



Ph.34 118号造構（東より）

で、全体的には円筒形となる。井戸を想起させるが、床面の標高は1.75mで湧水は得られず、井戸とは考えられない。土坑とするのが妥当であろう。

なお、造構検出時には、118号造構にかぶさって、107号造構を設定した。精査したところ、107号造構は浅い皿状土坑で、107号造構出土として取り上げた遺物は、すべて118号造構と重複し、しかも掘りすぎた部分から出土した。そこで、107号造構出土遺物を118号造構出土として扱うこととしたが、混入の危険を避けるため、遺物注記は107号造構のまましている。

出土遺物の主要なものを、Fig.31～33に示す。

1～10は、土師器である。107号・118号造構出土の土師器皿・壺の底部は、すべてへら切りであり、糸切りはまったく含まれていなかった。1～3は、皿である。口径9.1～9.5cm、器高1.2～1.55cmを有する。4～8は、壺である。口径14.0～15.5cm、器高2.9～3.7cmである。底部押し出しで、丸底気味に作る。内面は、基本的にこて当てで平滑に整えるが、部分的にへら磨きを加えている。9・10は、碗である。9の内外面や10の内面は、密にへら磨きされている。

11・12は、瓦器碗である。11は、在地の瓦器である。内外面はへら磨き

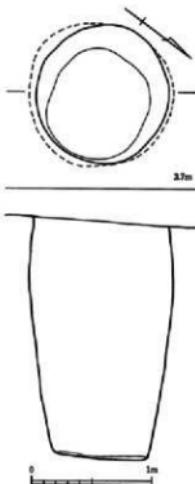
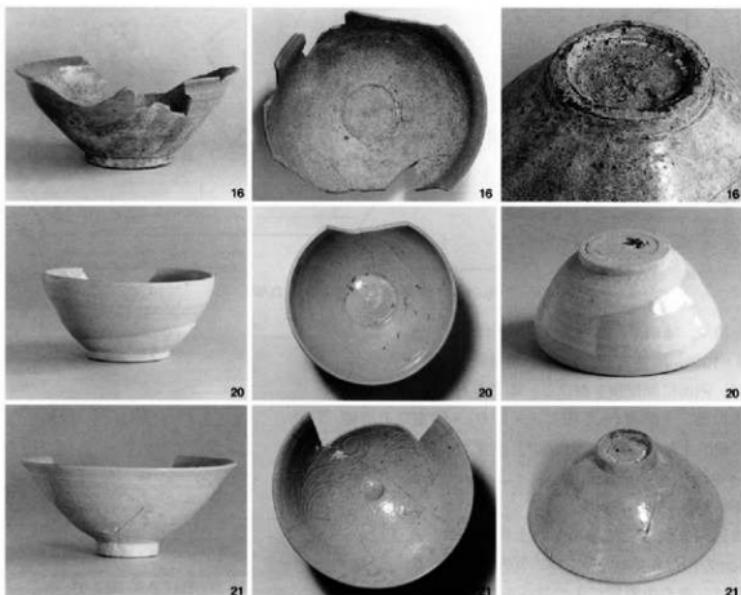


Fig.30 118号造構実測図 (1/40)



Ph.35 118号造構出土遺物

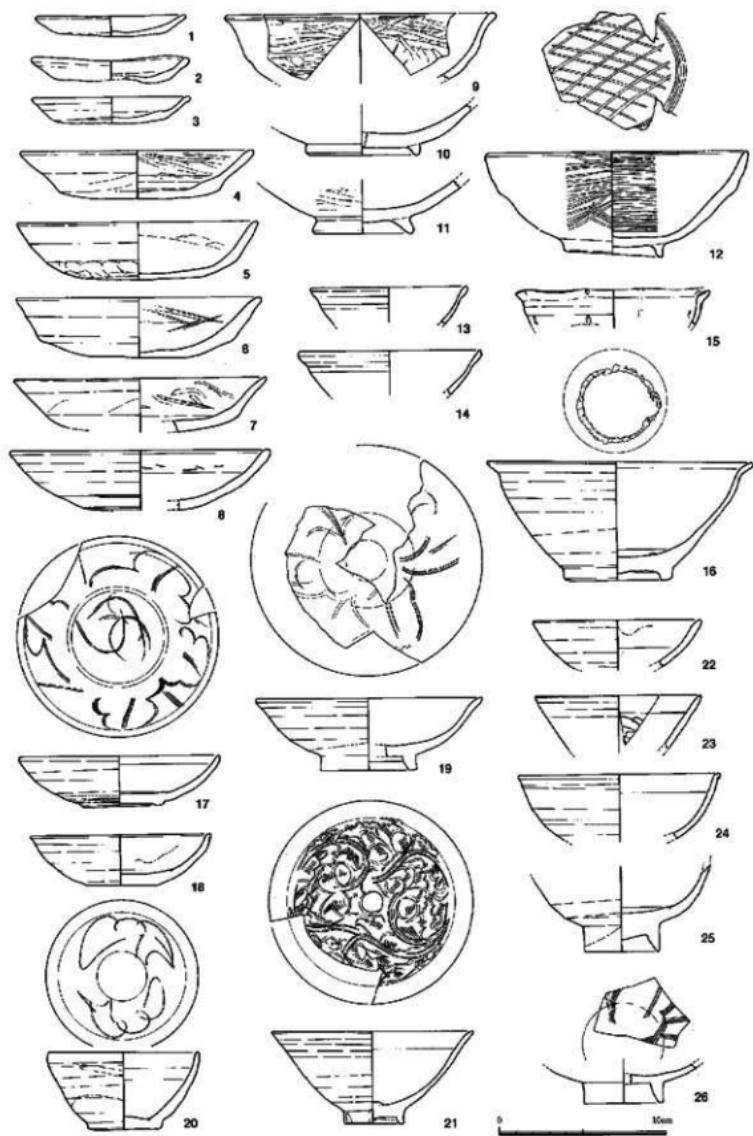


Fig.31 118号造構出土遺物実測図1 (1/3)

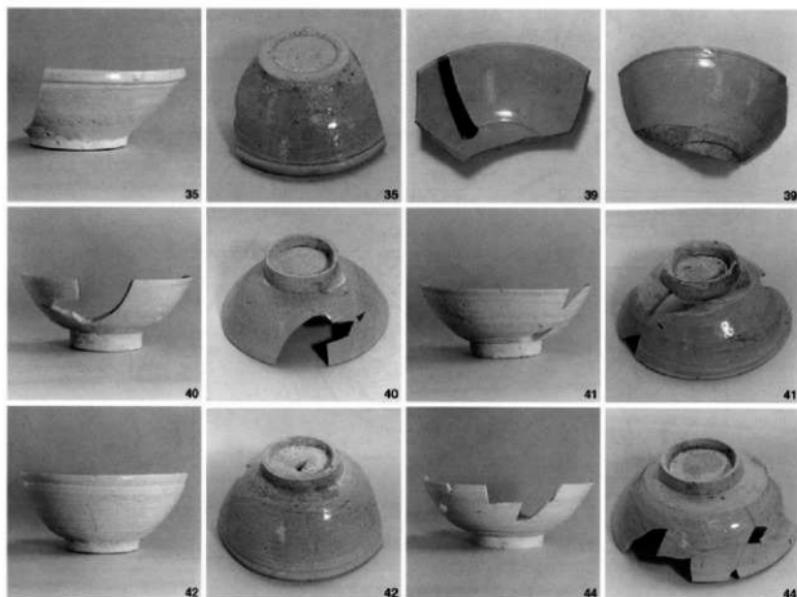
されるが、磨きの単位は見にくい。12は、楠葉型瓦器碗である(107号遺構)。外面は分割へら磨き、内面は平行へら磨きで、見込みは格子状暗文となる。

16は、高麗青磁の碗である。見込みと豊付きには、重ね焼きの目痕が巡る。

13・14は、連江窯系青磁の無文小碗である。

15は、青白磁の小碗である。口縁部は、外方から工具で押されて、輪花となる。

17~53は、白磁である。17・18は、平底皿である。17の内面には、片切り彫りと三本単位の櫛描きで花文を描く。19は、浅碗である。体部下位から高台は、露胎である。内面には、花文を描く。26は高台のみの破片だが、おそらく浅碗であろう。文様は、17と類似する。27も、浅碗であろう。20は、平底の环である。体部下半は、露胎。内面には、沈線で花文を描く。21~25は、小碗である。21の内面には、片切り彫りと櫛描きで花文を描く。23の内面にも沈線文が見える。おそらく花文であろう。24は、丸みを持った体部から、口縁を小さく外方に折り曲げて、玉ふち状に作る。25は、口縁部を欠くが、24と同様な口縁を持つものだろう。28~53は、碗である。28~34は、小さな玉縁状口縁を持つ、いわゆるⅡ類碗である。28・30・32・33の軸下には、白化粧が見て取れる。35~37は、大きな玉縁を持つⅣ類碗である。無文で、園線すら見られない。38~44は、V類碗(博多陶磁器分類)である。丸みの強い腰から直線的に延びて、口縁部はやや外反気味におさめる。42を除いて、見込みには園線が巡っている。39の内面には、茶褐色釉が垂れて溜まっている(107号遺構)。意図的な垂下ではなかろう。46・47もV類碗の口縁部である。49~53は、V類碗の底部である。49の高台内には、墨書きがみられる。いまひとつはっきりとしないが、文字と言うよりも、記号のように見える。



Ph.36 118号遺構出土遺物2

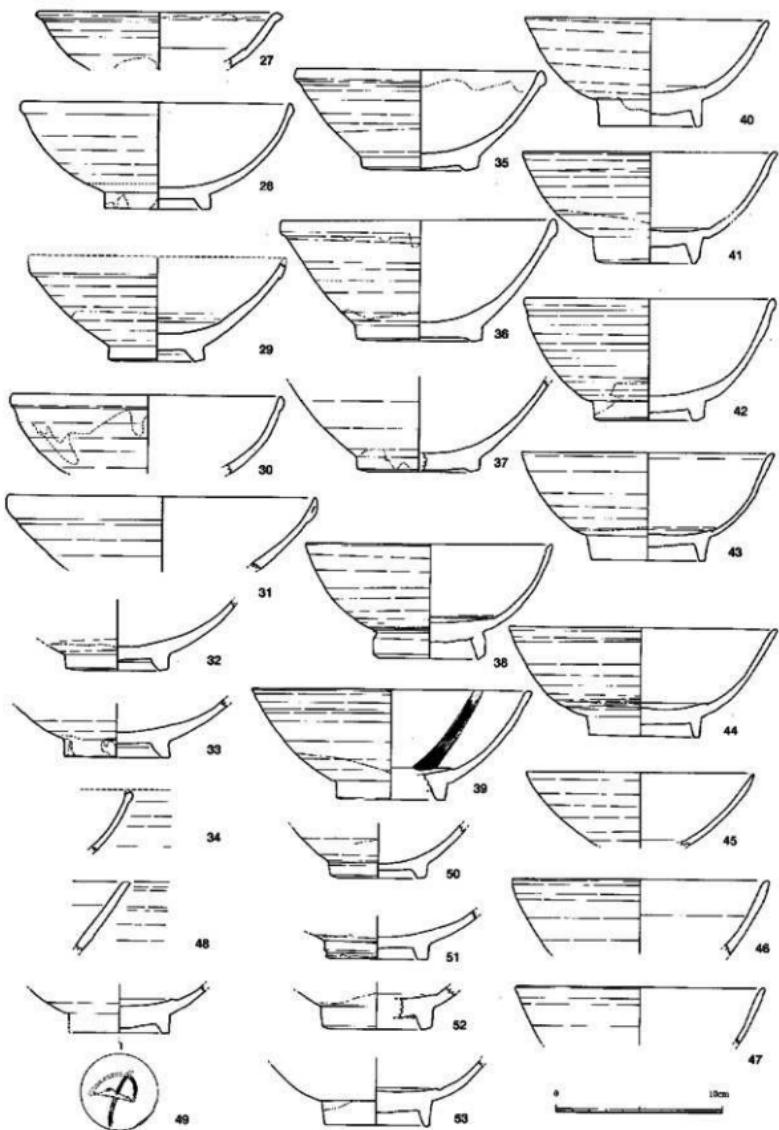


Fig.32 118号遺構出土遺物實測圖2 (1/3)

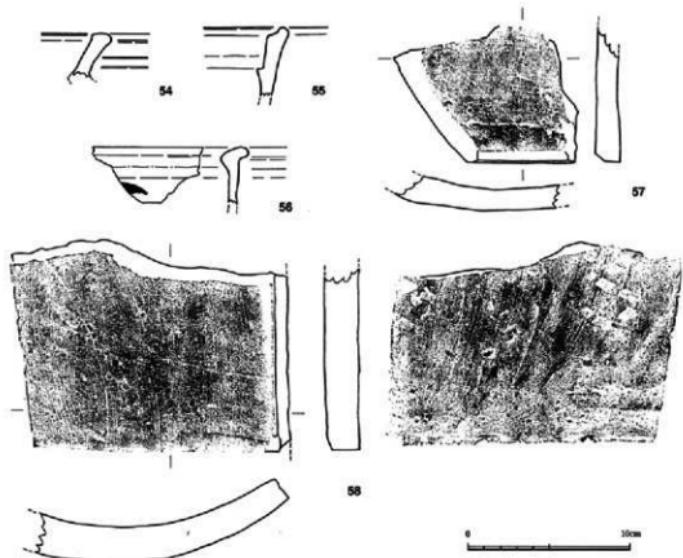


Fig.33 118号遺構出土遺物実測図3 (1/3)

54～56は、陶器である。54は、なまこがかった褐釉がかかる。小片のためはっきりしないが、壺の口縁であろうか。55は、無釉焼き締め陶器の捏ね鉢である。56は、黄釉鉄絵の盤もしくは鉢である。内面に鉄絵の一部が残る。

57・58は、平瓦である。凹面には布目が、凸面には削り痕跡が明瞭に残る。58の凸面には、削り痕跡の下に格子目叩きの痕跡が認められる。須恵質に焼成されている。

これらの遺物からみて、11世紀後半の土坑と考えられる。

269号遺構

B区南西壁際から検出した井戸である。第2面では、掘り方の上端を確認したにとどまる。第3面においては、井戸の重複が激しく、掘り方を掘り分ける事は困難であったが、井戸側の位置関係から、判別した。

掘り方は推定径390cm、掘り方の東に片寄つて結い桶を伏せた井戸側(直径75cm)をおく。桶の遺存状態は悪く、スponジ状の木質が検出できたに過ぎないが、短冊状の板材は確認できた(Ph.38)。



Ph.37 269号遺構(北西より)

出土遺物の一部をFig.34に図示する。1~3は、土師器である。1・2は、皿である。1は底部へら切りで、口径8.75cm、器高1.05cmを有する。2は回転糸切りで、口径9.5cm、器高1.05cm。3は、壺である。底部は回転糸切りである。口径14.0cm、器高2.85cmを有する。

4~6は、瓦器である。4・5は、楠葉型瓦器碗である。6は、在地の筑前型瓦器碗である。幅広のへら磨きを施すが、単位は極めて見にくい。

7は、高麗青磁である。皿もしくは碗。胎土は精良、作りは薄手で、精品である。

8・9は、初期龍泉窯青磁の碗である。9の高台は露胎で、「林」の墨書きがみられる。



Ph.38 269号遺構井戸側



Ph.39 269号遺構出土遺物

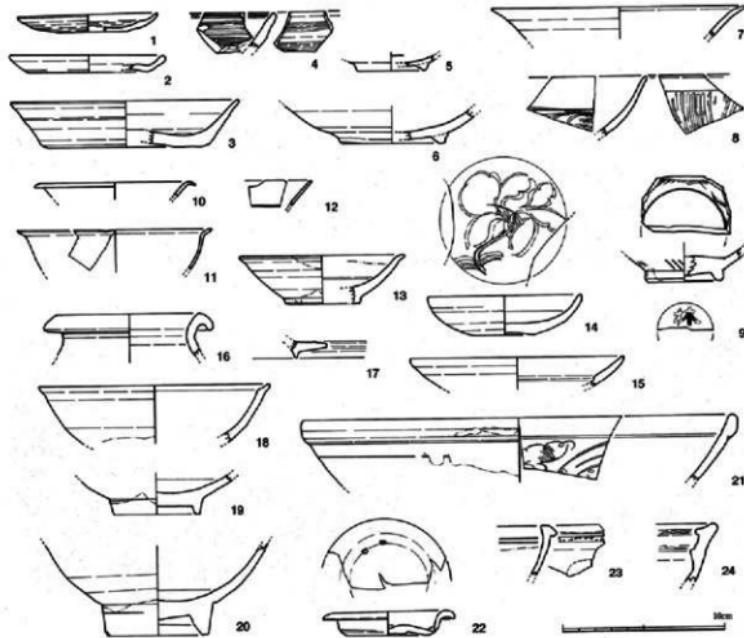


Fig.34 269号遺構出土遺物実測図 (1/3)

10~12は、青白磁である。いずれも小片で、10は皿、12は輪花小碗である。

13~21は、白磁である。13~15は、皿である。16は、壺である。口縁部を大きく折り返す。17は、壺の蓋であろう。鉢状部分の上面は施釉、下面は露胎となる。18~20は、碗である。18の口縁端部は、受け口状に屈曲する。19~20の見込みには、圓線が巡る。21は、鉢である。口縁は肥厚して玉縁状となる。内面には、片切り彫りと櫛描き文で花文を描く。

22~24は、陶器である。22は、褐釉陶器の蓋である。遺存部分では、二孔を一对とした穿孔がみられる。施釉は上面のみで、下面是露胎。23は、褐釉の鉢である。24は、無釉焼き縮め陶器の捏ね鉢である。

12世紀前半から中頃の井戸と考えられる。

318号遺構

B区北角付近で検出した井戸である。第2面では掘り方の一部を確認したにとどまるが、第3面において井戸側を検出した。掘り方は、直径430~465cmの円形を呈し、その中央からやや北に偏して井戸側を設ける。井戸側は、直径80cmの結い桶を据えたもので、下から二段目までを確認する事ができた。ただし、遺存状態は悪く、木質を検出したにとどまる。

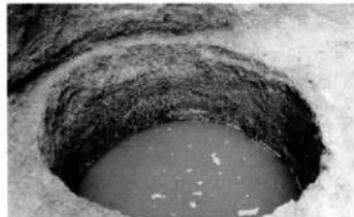
出土遺物をFig.35に図示する。1~20は、土師器である。1~12は、皿である。器高が高い1~3(口径7.8~8.4cm、器高1.5~1.95cm)と、浅くて偏平な4~12(口径7.2~8.9cm、器高0.9~1.35cm)の二種がある。13~19は壺である。口径11.4~15.7cm、器高2.45~2.8cm、法量にはばらつきが著しい。皿・壺ともに底部は、回転糸切りである。20は、橈である。内面は平滑になじ調整、外面は横なでする。21~27は、青白磁である。21~23は、合子の蓋である。24は、小碗である。見込みには、印花文がみられる。25は、小壺の破片である。26は、小碗もしくは皿である。極めて薄手で、精良。27は、皿である。体部外面に、蓮弁文を陽刻する。

28~34は、白磁である。28~30・32・33は、皿である。28は、見込みを輪状に釉剥ぎする。29は、口禿に作る。30は平底皿で、底部には墨書きを持つ。判然としないが、「傳」と読みみたい。31は、小碗である。外底部に「豆」字様の墨書きを持つ。34は、碗の底部である。見込みは、輪状に釉剥ぎする。

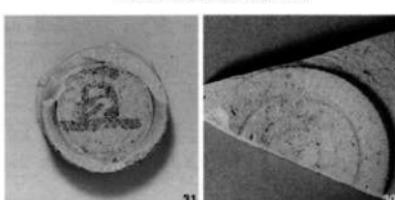
35は、越州窯系青磁の碗である。



Ph.40 318号遺構（南東より）



Ph.41 318号遺構 井戸側（南東より）



Ph.42 318号遺構出土遺物

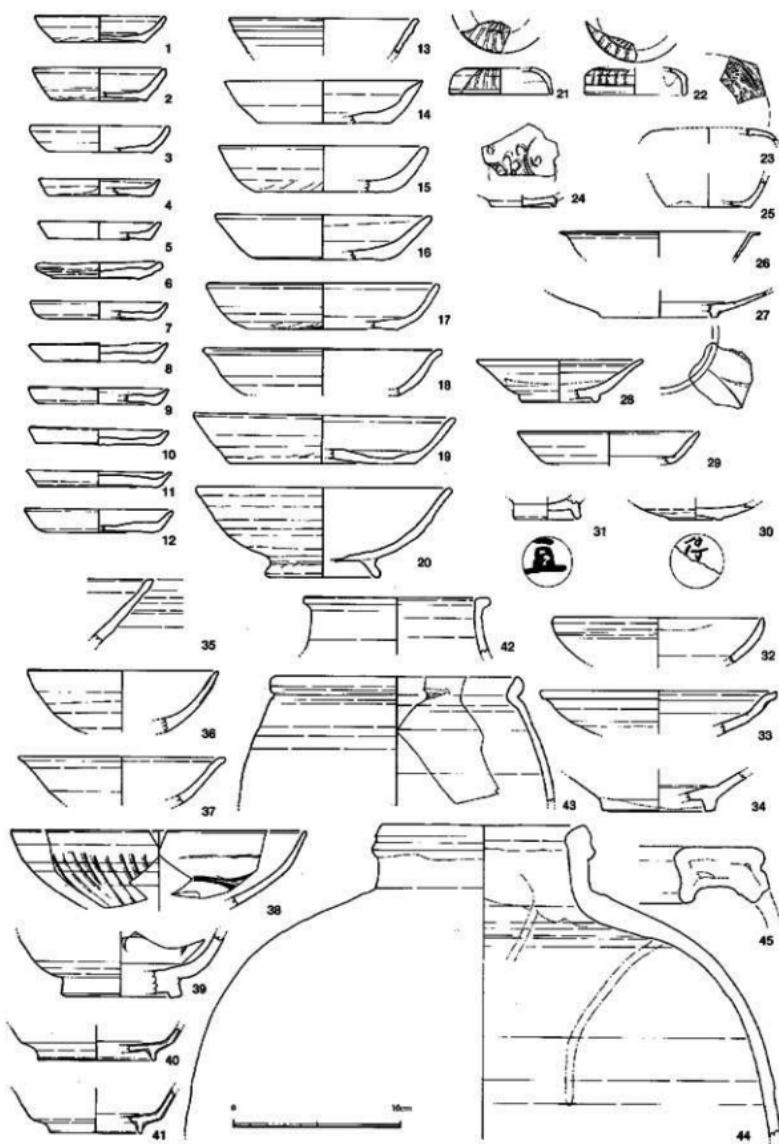


Fig.35 318号遺構出土遺物実測図 (1/3)

36～41は、青磁である。36・37・39～41は、龍泉窯系青磁である。36・37は、小碗、39は碗、40・41は、小鉢である。39の内面には、割花文が見られる。40・41は、全面施釉の後、高台疊付きの釉をかき取る。38は、同安窯系青磁の碗である。

42～45は、陶器である。42は、褐釉の壺口縁である。43は、短頸壺である。屈曲した口縁の内傾面には、重ね焼きの目痕がみられる。44は、褐釉の大型壺である。45は、大甕である。緑褐色の釉がかかる。

これらの出土遺物からみて、13世紀後半から14世紀前半頃の井戸であろう。

(3) 第3面

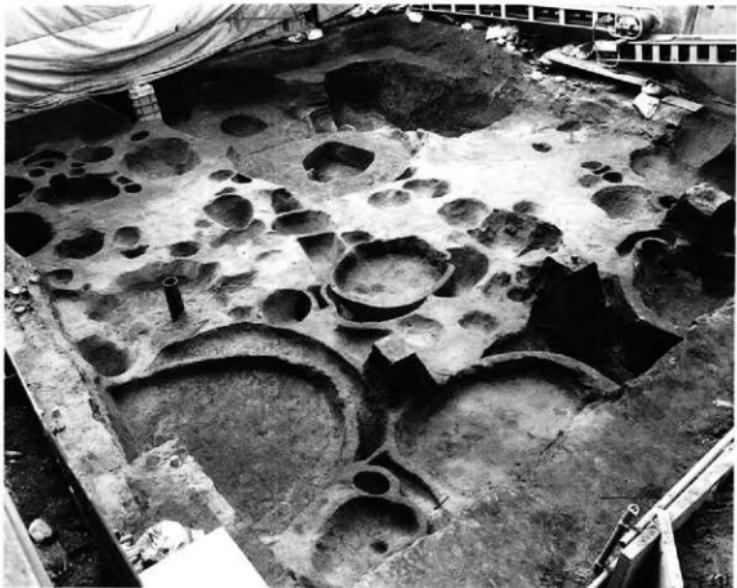
砂丘砂層の上面で設定した、遺構検出面である。標高3.4～3.2mをはかる。若干ながら、南東から北西に向かって下降している。

弥生時代に属すると思われる遺構から13世紀代まで、遺構の時代幅は大きい。時期の想定が可能な遺構を列挙すると、132号遺構(7～8世紀)、133号遺構(古代)、138号遺構(9世紀)、140号遺構(12世紀後半)、142号遺構(8世紀後半)、146号遺構(8世紀末)、153号遺構(11世紀後半)、160号遺構(9世紀前半)、164号遺構(9世紀)、167号遺構(9世紀)、177号遺構(8世紀末)、179号遺構(11世紀後半)、180号遺構(8世紀後半)、184号遺構(11世紀後半)、189号遺構(13世紀)、191号遺構(11世紀後半)、194号遺構(古墳前期?)、195号遺構(古代)、198号遺構・199号遺構・200号遺構(9世紀前半)、331号遺構(8世紀)、332号遺構(弥生後期)、333号遺構(古墳前期)、334号遺構(8世紀)、335号遺構(古墳前期)、340号遺構(12世紀後半)、342号遺構(古代)、353号遺構(13世紀前半)などである。12・13世紀代の遺構については、第2面で確認しそこなった遺構を、第3面で検出したものである。

また、井戸の分布を見ると、B区の北側半分に集中している。これは、時代を越えて良質な伏流水を求めて続けた結果であろう。



Ph.43 B区第3面土器出土状況（南東より）



Ph.44 第3面全景 (1) A区、南より (2) B区、北西より

(2)

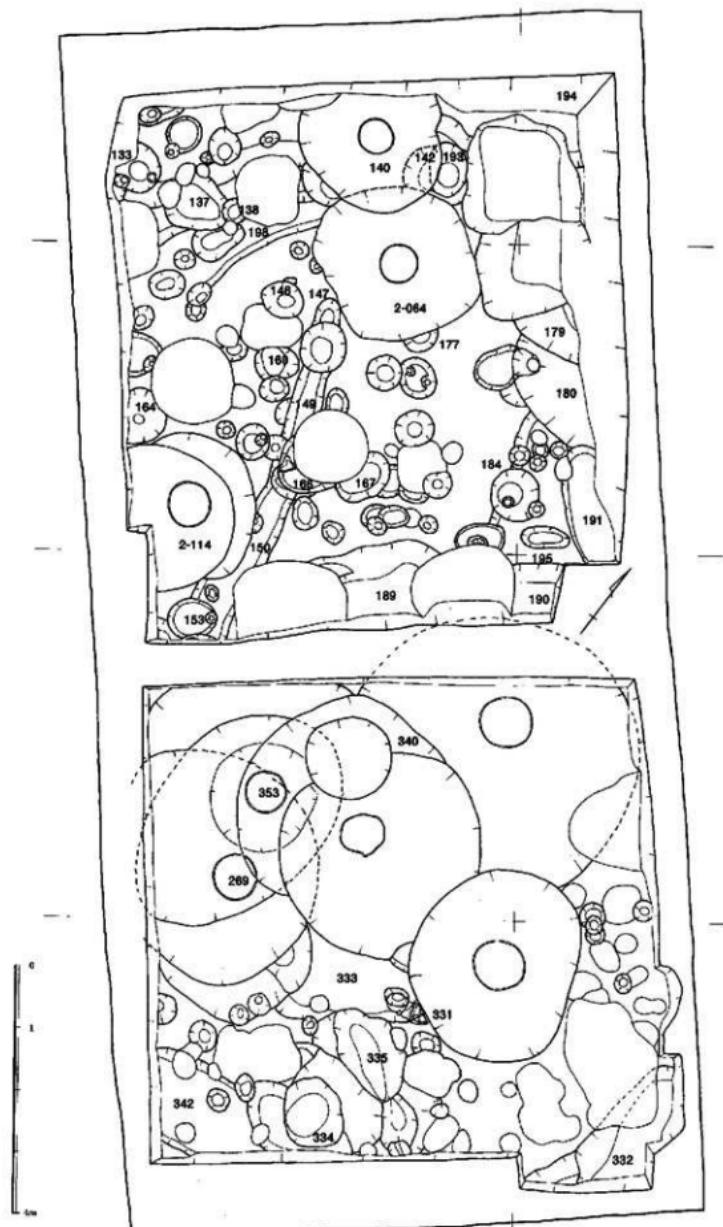


Fig. 36 第3面造構平面図 (1/80)

133号遺構

A区西角付近から検出した、柱穴状の小土坑である。一部が調査区外にでるが、直徑80cm程の円形を呈すると推定される。遺構検出面から底面までの深さは、64cmほどである。

埋土中から、土師器皿が出土した。Fig.37に図示する。底部は回転へら切りである。体部は横なで調整、内底部は静止なで調整する。口径15.2cm、底径10.8cm、器高1.8cmをはかる。体部の一ヶ所に、へら記号「十」が刻まれている。古代(8・9世紀)頃の柱穴であろう。



Ph.45 133号遺構 (西より)



Ph.46 133号遺構出土遺物



Fig.37 133号遺構出土遺物実測図 (1/3)

140号遺構

A区北西壁中程から検出した井戸である。掘り方の三分の一ほどが、調査区外に出る。掘り方は、直径230cmほどの円形を呈し、そのほぼ中央に井戸側を据える。

井戸側は、底を抜いた結い桶を据えたものと思われるが、木質の遺存状態は悪く、短冊状の板材等、結い桶の形状を明瞭にとどめるものは確認できなかった。井戸側は直径64~66cmの円形を呈する。井戸側の最下部は、標高80cm付近まで確認したが、湧水のため、それ以上追えなかった。

出土遺物の一部を、Fig.38に示す。1~3は、土師



Ph.47 140号遺構 (南西より)

器である。1は皿で、口径9.3cm、器高1.15cmをはかる。底部は、回転糸切りである。2は、壺である。底部はへら切りで、口径14.7cm、器高3.8cmをはかる。内面はこて当て、外面には指頭圧痕が並ぶ。3は、碗である。内外面とも密にへら磨きする。磨き痕跡は、幅広で浅く捉えにくいが、分割へら磨きと思われる。復元口径14.4cm。

4は、瓦器の椀である。在地の筑前型であるが、この他楠葉型瓦器椀の小片も出土している。

5・6は、青白磁である。5は、合子の蓋である。胎土は白色で緻密、光沢の強い、若干青みを帯びた透明釉を施しており、精品である。6は、皿もしくは小碗である。口縁部にへらを当てて重ませ、

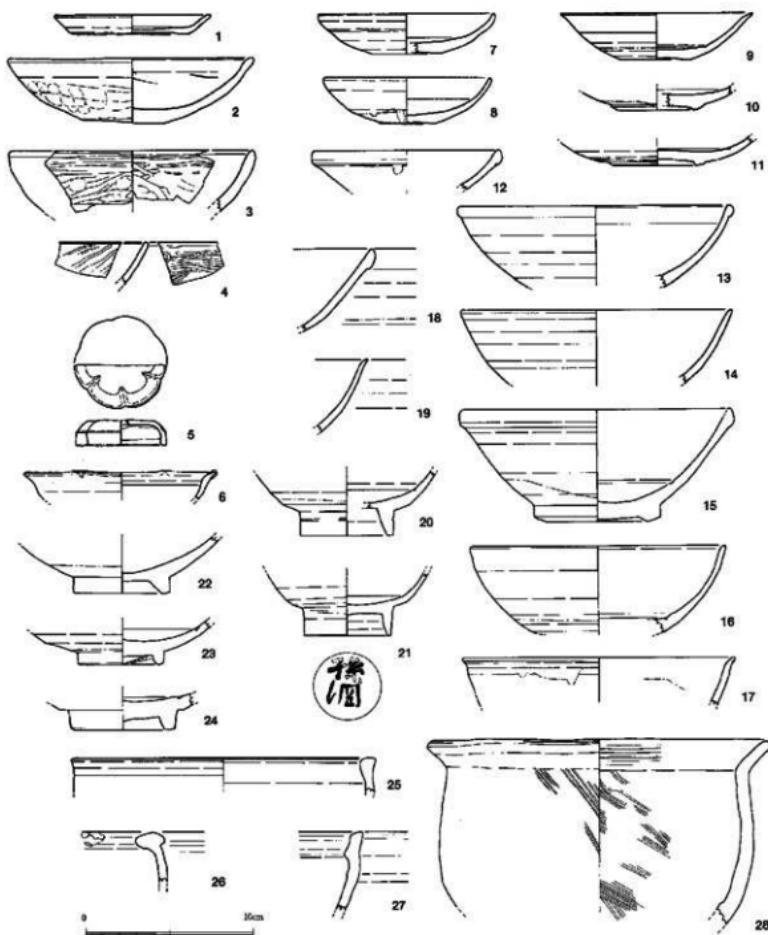


Fig.38 140号造構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.48 140号遺構出土遺物

輪花に作る。

7~24は、白磁である。7~12は皿、13~24は碗である。7・8・9は、平底である。10・11は、底部の端を削り込んで、小さい高台状に作る。12は、玉縁状口縁につくる。底部を欠くが、高台を持つタイプである。13・14・22は、II類碗である。15・18はIV類碗で、玉縁口縁に作る。15の見込みには、團線が巡る。16・17・19は、博多陶器分類のV類碗である。20・21は、広東系白磁である。21の高台内側には、「孫綱」の墨書が書かれている。

25~27は、陶器である。25は、無釉陶器の鉢である。胎土は、泥質できめ細かい。横なで調整だが、成形は丁寧で、整っている。26は、褐釉陶器の鉢である。口縁の上面には、重ね焼きの目痕が付いている。27は、無釉焼き締め陶器の捏ね鉢である。

28は、土師器の甕である。内外面とも刷毛目調整されているが、火熱による剥離が著しい。

このほか、時期的には遡るが、越州窯系青磁・高麗青磁なども出土している。また、小片のため図示できなかったが、青磁片も出土しており、12世紀後半の井戸とするのが妥当であろう。

142号遺構

A区の北角付近から検出した。擾乱や井戸に切られ、部分的にしか残っていない。推定復元で、長径128cm、短径96cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは26cm前後を測る。

出土遺物を、Fig.40に図示する。1・2は、土師器である。1は、黒色土器A類の椀である。内面は密に横方向のへら磨き、外面は横なで調整する。2は、土師器の皿である。内底は同心円状のへら磨き、体部は横方向に密なへら磨きを加える。

3~5は、須恵器の高台坏である。底部から体部に移行する屈折部のやや内側に、断面が角張った高台を貼り付けた。

8世紀後半頃の小土坑であろう。

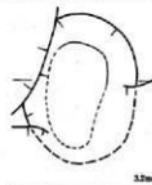


Fig.39 142号遺構実測図
(1/40)

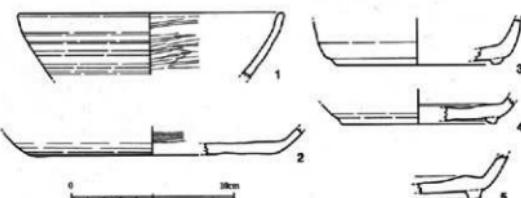
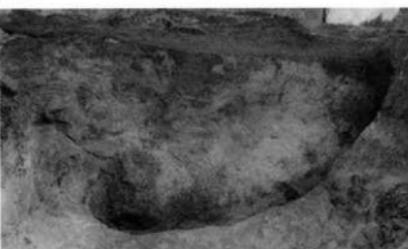


Fig.40 142号遺構出土遺物実測図 (1/3)

180号遺構

A区北東壁際から検出した大型の土坑である。大半が調査区外に出ると、他の遺構に切られるため、規模は明らかではない。

出土遺物をFig.41に図示する。1~3・5・6は土師器である。1・2は、壺である。1は、高台がつく可能性がある。外面は横なで調整する。3は、高台壺である。厚くて断面三角形の高い高台が、貼りつく。5・6は、壺である。5の口縁内面には、細かい刷毛目調整が認められる。全体に器内は薄い。6は、短頸壺である。頸部はやや伏せ気味に直立する。口縁部内面は



Ph.49 180号遺構（北東より）



Fig.41 180号遺構出土遺物実測図 (1/3)

刷毛目調整、外面は横なで調整する。体部外面は刷毛目、内面はコテ当てで平滑に仕上げる。

4は、須恵器の壺である。内外面とも横なで調整する。

これらの出土遺物から見て、9世紀頃の土坑と考えられる。

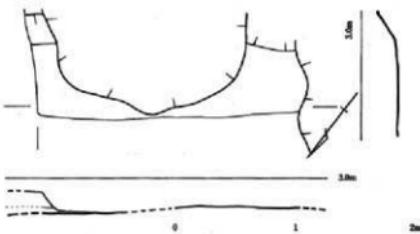


Fig.42 194号遺構実測図 (1/40)

194号遺構

A区の北角付近から検出した遺構である。第1面10号遺構や第3面140号遺構に切られ、全体を知りえない。わずかに残った部分と、調査区壁面の土層観察からは、急傾斜の落ちと平坦な床面が看取できる。この状況から推測して、竪穴住居跡に類する遺構の可能性を考えたい。

黒色土器B類陶の小片などが出土しているが、図示に耐えなかった。

所属時期を判断する根拠に欠けるが、10世紀頃の遺構と思われる。



Ph.50 194号遺構（南より）

198・199・200号遺構

A区西角付近から検出した遺構である。暗茶褐色砂を埋土とし、耕土したところ、三段の落ちとなつた。それぞれ、外側から198号・199号・200号遺構としたが、埋土を慎重に検討しても、切り合い関係を示すような差異は認められなかつた。調査区北西壁に見られる断面からは、200号遺構の床面が平坦である様子がうかがわれ、194号遺構同様に、竪穴住居跡の可能性を考えたい。

出土遺物をFig.44に示す。1~4は、198号遺構の遺物である。1は、土師器の壺蓋である。端部のかぶり部分は小さい。2は、須恵器の壺である。時期的に先行する。3は、土師器壺の口縁である。4は、管状土錐である。

5~7は、200号遺構の出土の土師器である。5は、鉢であろう。内外面には、細かい刷毛目が見られる。6は、小型丸底壺の口縁であろう。なで調整するが、内面には薄く刷毛目調整が残っている。7は、甕の口縁であろう。内外面には、細かい刷毛目が認められる。

9世紀頃の遺構と考えられる。

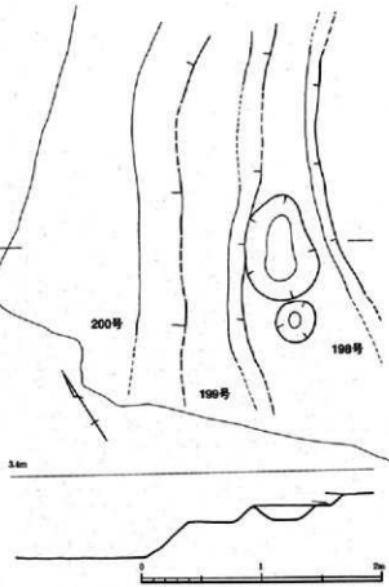


Fig.43 198~200号遺構実測図 (1/40)



Ph.51 (1) 198~200号遺構 (北より)



Ph.51 (2) 200号 (南西より)

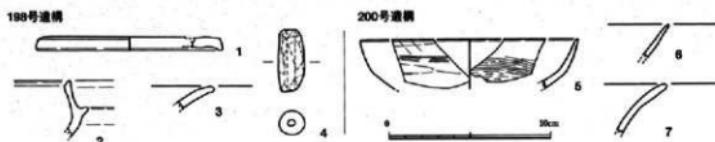


Fig.44 198・200号遺構出土遺物実測図 (1/3)

331号遺構

B区の中央付近から検出した甕棺墓である。三基の甕型土器を連結したもので、中央の甕は底を抜いてはめ込んでいる。

掘り方は、周囲を多数の遺構に切られ本来の形をとどめていないが、現状では長軸128cm、短軸46cmの小判型を呈する。遺構検出面からの深さは、46cmをはかる。

甕棺は、掘り方の中央に、頭位をほぼ東に向けて据えられている。頭側が若干上がっているが、あまり意識した風ではなく、水平位に置いたものと見ても大過なからう。下甕は遺存状態が良く、中間の甕も土圧で割れているに過ぎないが、上甕は第1面224号遺構(井戸)に切られ、下半部を大きく欠失している。

Fig.46に甕棺の甕型土器を示す。1は、上甕である。口径27.2～28.4cm。2・3は、下甕である。2は中間に挟まれたもので、底部は本来打ち抜かれている。口径29.3～29.8cm。3は、完形品であるが、土圧で大きく歪んでおり、口径26.0～29.0cmを測る。調整は、外表面は刷毛目調整、内面は1・2は削り、3は刷毛目で頸部下は削りである。口縁部内面は横刷毛目、外表面は撫で調整である。

2の口縁部には、4ヶ所に墨痕が認められ、そのうちのひとつは「信」と読めそうである。

時期を細かくは決められないが、8世紀代であろう。

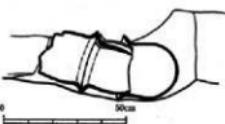
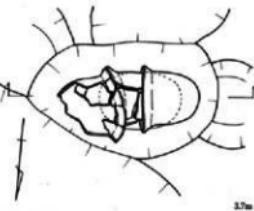


Fig.45 331号遺構実測図 (1/20)



Ph.52 331号遺構 (北西より)

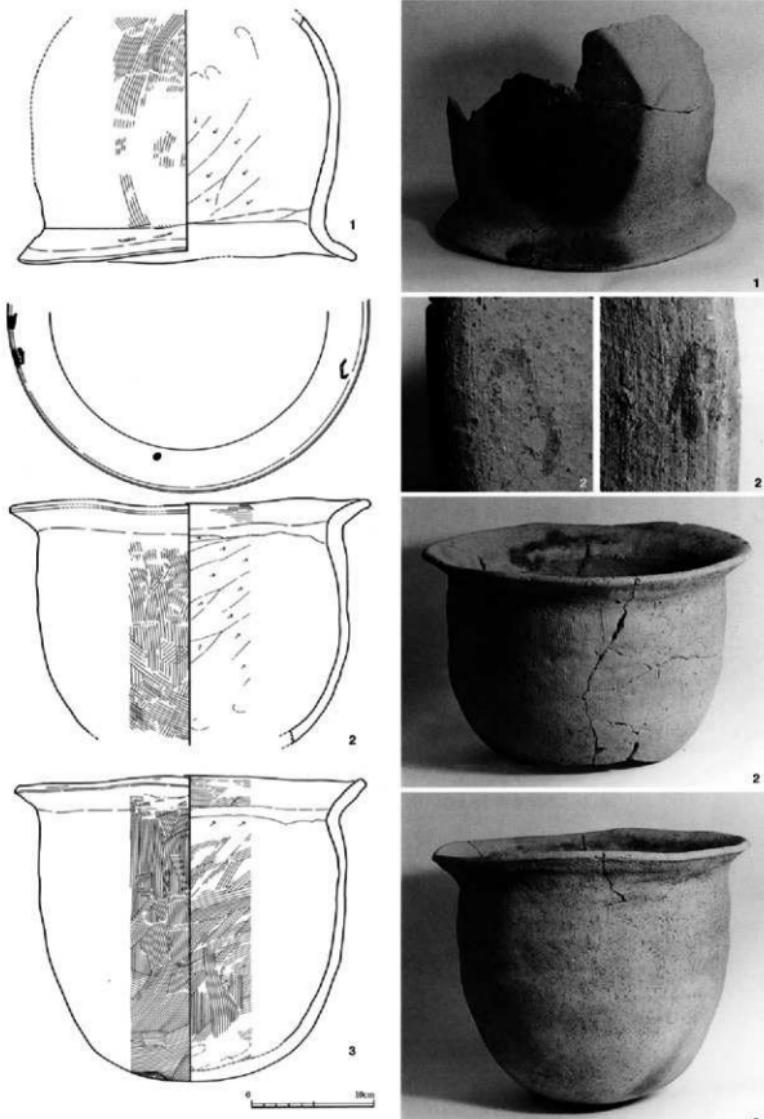


Fig.46 331号遺構出土遺物実測図 (1/4)

Ph.53 331号遺構出土遺物

332号遺構

B区東隅付近から検出した遺構である。調査区の角を斜めに横切る形で検出し、またかなりの部分が第1面・第2面の遺構によって飛ばされていたため、部分的に調査区を拡大し、遺構内容の把握に努めた。しかし、全体の規模は確認できなかった。壁面は直線的で、急傾斜で立ち上がるが、南側付近で西に流れる。切り合があるかとも思うが、埋土の上からは確認できなかった。遺構検出面から床面までは、37cmを測る。床面は、平坦である。竪穴住居跡の可能性を考えたい。

出土遺物をFig.48に示す。1~6は、弥生土器である。1は、壺である。外反した口縁の内面に粘土紐を貼り付け、鍔状口縁に作る。外面は、横刷毛目上に、縦方向の暗文を重ねる。2は、高環である。外面は、刷毛目調整に暗文を施す。3・6は、甕である。「く」字形に屈折した口縁を持つ。4は、鉢である。5は、甕の底部である。

丸底気味の平底に作る。
この他、黒曜石の剥片が出土している。

弥生時代後期前半の遺構であろう。



Ph.54 332号遺構（北より）

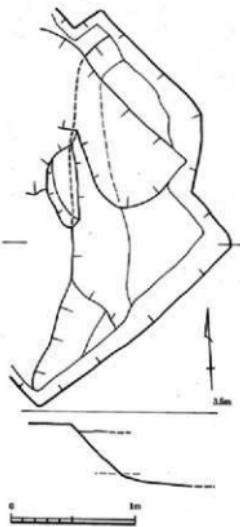


Fig.47 332号遺構実測図（1/40）

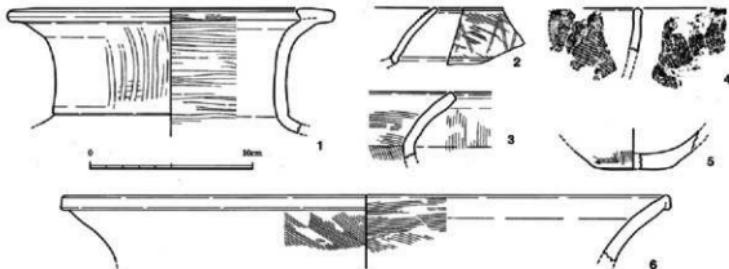


Fig.48 332号遺構出土遺物実測図（1/3）

333号遺構

B区の中央付近から検出した遺構である。竪穴住居跡と思われるが、全体の形状は知りえない。方形住居跡の一辺(2.3m程度)を調査したものと思われる。床面は平坦で、遺構検出面からの深さは、36cmをはかる。

Fig.50に出土遺物を示す。1~8は、弥生土器である。1~4は、甕である。「く」字状に屈折した口縁を持つ。5・6は、甕の底部である。わずかに丸みを帯びた平底に作る。7・8は、壺の底部であろう。

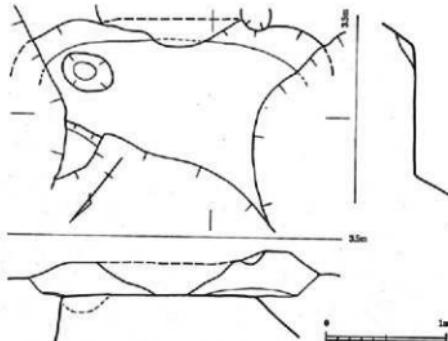


Fig.49 333号遺構実測図 (1/40)



Ph.55 333号遺構 (1) 北西より



(2)

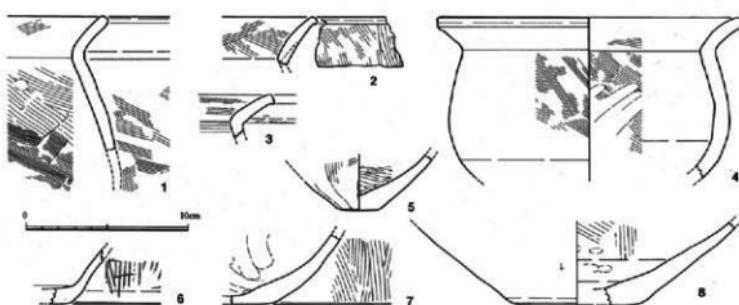


Fig.50 333号遺構出土遺物実測図 (1/3)

この他、図示していないが、小型の壺型土器が出土している。頸部は明瞭な稜を作らず、口縁は直立する。底部は、丸底となる。

図示した遺物は弥生時代後期を示すが、丸底壺を重視して、古墳時代前期の遺構と見るのが妥当であろう。

334号遺構

B区南東壁付近で検出した土坑である。中央を第1面の253号遺構が貫通している。おおむね、直径210cmの円形を呈する。遺構検出面からの深さは、25cm前後である。



Ph.56 334号遺構（南東より）

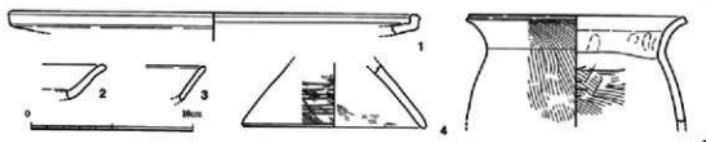


Fig.51 334号遺構出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物をFig.51に図示する。

1・2は、須恵器である。1は、盤の口縁である。横なで調整する。2は、環の口縁である。内外面とともに、横なで調整する。

3～5は、土師器である。3は、壺の口縁である。横なで調整する。4は、器台の脚部であろう。外面は、刷毛目の上に暗文、内面は刷毛目をなで消している。5は、甕である。外面は縦方向の刷毛目調整で、頸部をまたぎこして、体部から口縁部まで刷毛目が通る。口縁部は緩く外反するが、刷毛目調整後に作り出したものである。体部内面は刷毛目、頸部は指なで、口縁内面は横なで調整する。

8世紀後半の土坑である。

335号遺構

B区南東壁の中程近くから検出した土坑である。周囲を多数の遺構に切られ、本来の掘り方の形状はほとんど残っていない。床面は二段掘り状を呈しており、切り合いの可能性があるが、埋土には差異がなく、調

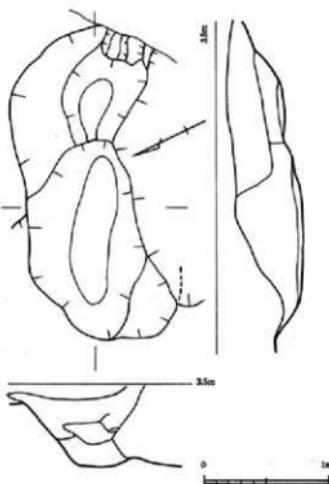


Fig.52 335号遺構実測図 (1/40)

査時には区別できなかった。推定で、長軸300cm、短軸120cmの長楕円形を呈し、造構検出面からの深さは、54cmをはかる。埋土上面から、土器がまとまって出土した(Ph.58)。

出土遺物をFig.53に図示する。

1・2は、古式土器である。1は、高环である。外面とも暗文がみられる。2は、甌である。体部外面は刷毛目、内面はへら削り、口縁部は横なで調整する。

3～5は、弥生土器の底部である。3・4は平底で中期、5は丸底がかった平底で後期に属する。

6は、鉄製捕鐘である。板状の鉄板の両端を折り曲げたもので、向かって右側の返りは、さらにもう一度外側に折り返している。

このほか、弥生時代の大型片、丹塗り磨研の壺破片などが出土している。

古墳時代前期の土坑である。



Ph.57 335号造構 検出状況（西より）



Ph.58 335号造構遺物出土状況（北西より）



Ph.59 335号造構 完掘状況（南東より）

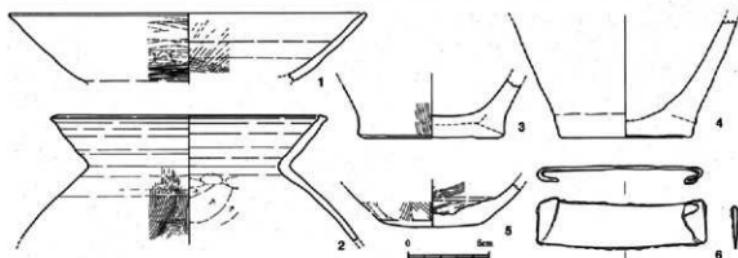


Fig.53 335号造構出土遺物実測図 (1/3)

342号遺構

B区南角近くから検出した溝状の土坑である。両端は調査区外に出、また他の遺構に切られているため、全形は知り得ない。西側でやや幅が狭まっているため、西側調査区外で収束する可能性も考えうる。検出した範囲で、延長220cm以上、幅135cm、検出面からの深さ21cmをはかる。

出土遺物をFig.54に示す。1~4は、土器である。1は、壺である。底部は、回転へら切りである。体部は横なです。2は、高台壺である。底部と体部の境界に高台が貼り付く。3は、黒色土器A類の碗である。内面はへら磨き、外面は横なで調整する。4は、甕である。体部外面は、綵刷毛目、口縁部内面は横刷毛目、体部内面はへら削りである。

9世紀代に属する溝状土坑である。

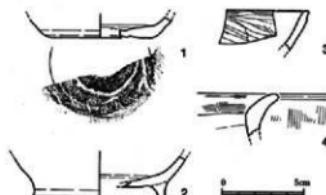


Fig.54 342号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.60 342号遺構 (東より)

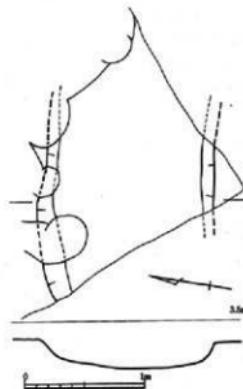


Fig.55 342号遺構実測図 (1/40)

353号遺構

B区の西隅付近から検出した井戸である。井戸の切り合が激しく、全体を明らかにすることはできなかった。掘り方は、推定で長軸400cm、短軸270cmの楕円形を呈する。掘り方の北に偏って底を抜いた結い桶を据え、井戸側とする。結い桶の遺存状態は悪く、スポンジ状の木質を確認したにとどまる。桶の直径は、65cm前後を計る。また、標高1.6mで井戸側の木質を検出し、標高1.01mで板材の下端を確認した。ちなみに調査時点での溝水は1.2m付近から見られる。

出土遺物のうち、図示に耐えたものをFig.56~58に示した。

1~5は、土器である。1~4は、皿である。1~3は、底部を回転へら切りするもので、口径8.4~8.8cm、器高1.1~1.45cmを測る。4は、底部を回転へら切りする。口径9.2cm、器高1.3cmである。5は、壺である。底部は回転へら切りで、口径15.0cm、器高2.95cmをはかる。

6・7は、須恵器である。6は、甕である。舌状に伸びた口縁部の破片で、口縁端部には小さな段がつ

く。7は、東播系須恵器の捏ね鉢である。口縁部は、受け口状に屈曲する。

8・9は、備前焼であろう。胎土は灰白色で、練りはやや荒い。須恵質に焼成されるが、表面はテリ状の光沢を持つ。8・9は、共通した特長をもち同一個体の可能性が高いが、計測値としては口径がやや異なり、別個体として図示した。

10～12は、青白磁である。10は合子の蓋で、印花文を持つ。11は、灯火器の皿部分であろう。鉢状に折り返した口縁端部は欠けている。12は、碗である。全面施釉する。内面には、見込みに双魚をあしらった印花文が見られる。

13～31は、白磁である。13～18は皿である。13～15・18は平底、16・17には高台がつく。18の見込みには、沈線で花文を描く。19～31は、碗である。19は、細い玉縁がつく、いわゆるⅡ類碗である。20・21・25は、大きい玉縁のⅣ類碗である。23・29の内面には、櫛書きで花文を描く。30・31の見込みには、輪状の釉剥ぎが見られる。

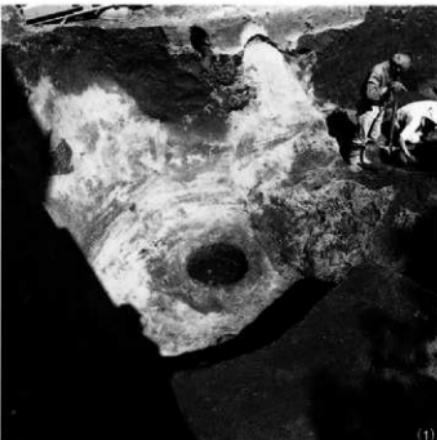
32～37は、青磁である。32・33・36・37は同安窯系青磁で、32・33は皿、36・37は碗である。内面には、櫛書きの雷光文と片切り彫りの花文をあしらう。34・

35は、龍泉窯系青磁の碗である。34は、体部外面に蓮弁文を、内面には片切り彫りの刻花文をあしらう。35は、高台部の破片である。豊付まで施釉され、高台内側は露胎となる。

38～51は、陶器である。38は、無釉の蓋である。39～41は、黄釉鉄絵の盤である。口縁は鉢状に作り、その上面には目跡が付着している。43は、黄釉鉄絵の鉢である。口縁は、小さく折り返す。45・46は、黄釉鉄絵の鉢もしくは盤である。口縁は、角張った玉縁状に作る。口縁の内傾した面に重ね焼きの目跡がつく。42は、褐釉陶器の鉢である。44は、緑褐釉陶器の四耳壺である。口縁は折り返して、玉縁状に作る。47は、無釉陶器の捏鉢である。口径21cm。48は、緑褐釉陶器の壺である。内面には、青海波状の叩き痕跡が見られる。口径49.5cmをはかる。49・50は、褐釉陶器の瓶である。49は、高台際から露胎となり、外底部には墨書きが見られる(文字、解読不能)。51は、無釉陶器の鉢である。外底部には、重ね焼きの目跡が並ぶ。現状では2個が付着しているが、遺存部分から見れば、4個が用いられたものと推測される。

この他、井戸側からは鍋蓮弁文の青磁碗片などが出土している。

13世紀前半代の井戸と考えて大過なかろう。



Ph.61 353号遣構 (1) 南より (2) 井戸側・南より

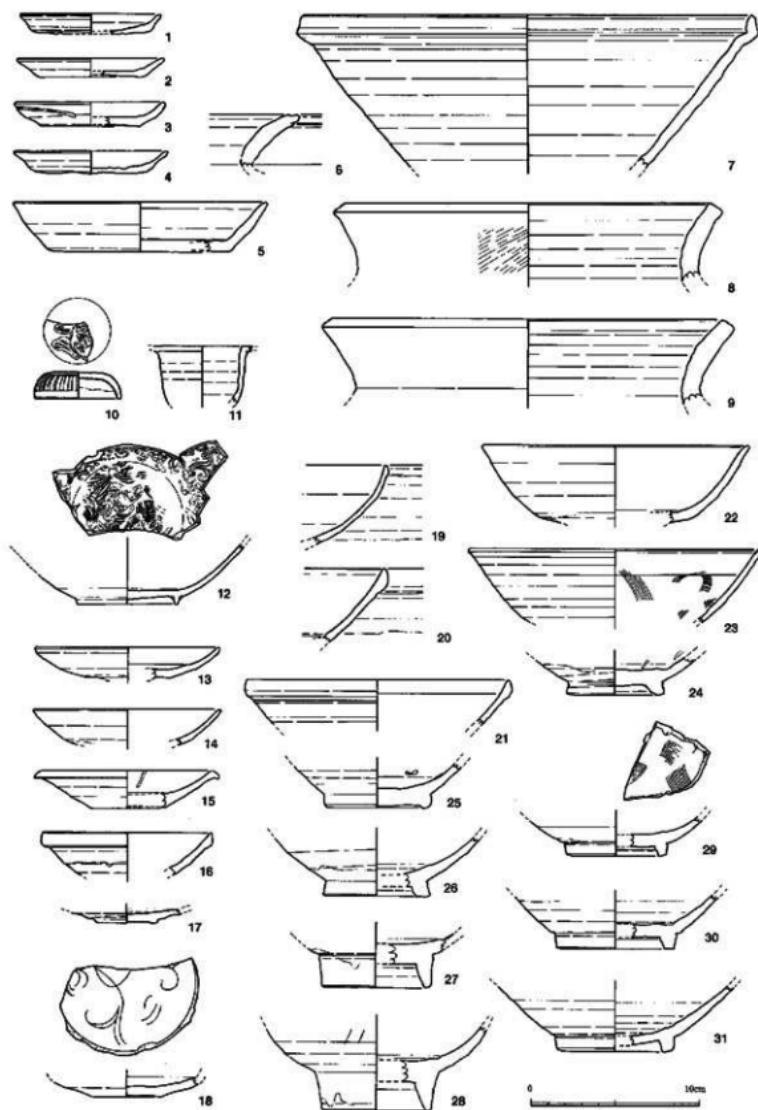


Fig. 56 353号道橋出土物実測図1 (1/3)

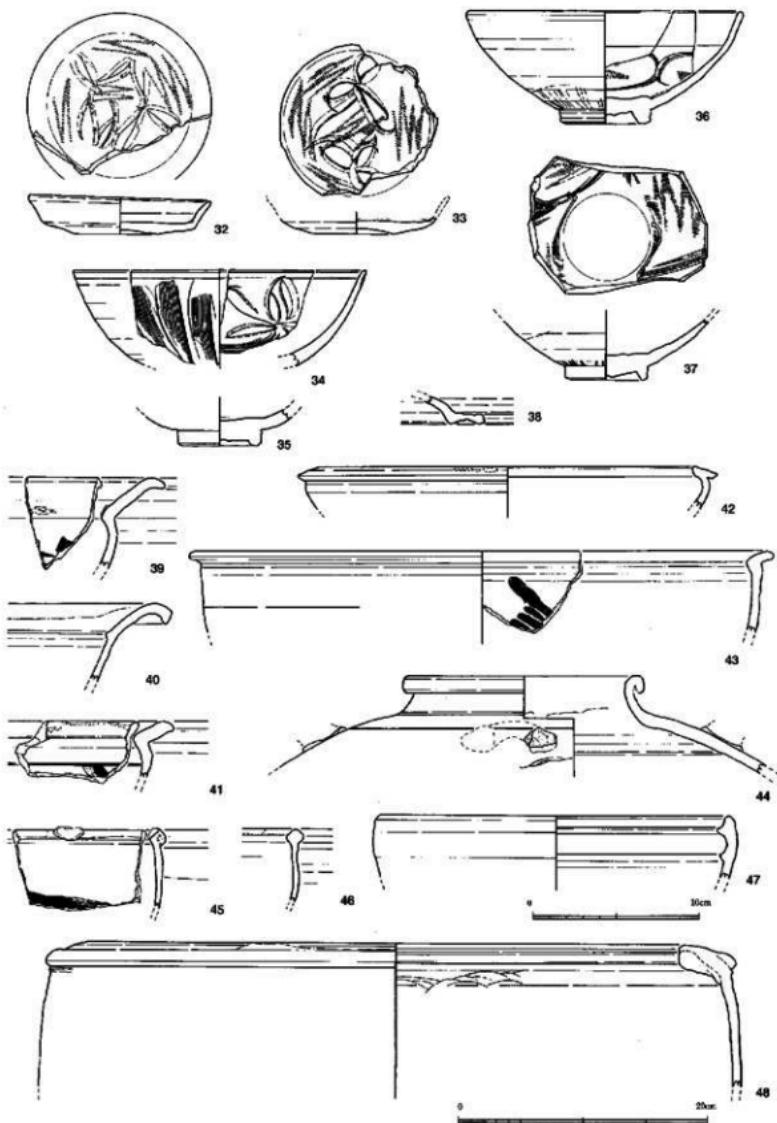


Fig.57 353号墓出土文物实测图2 (1/3 · 1/4)

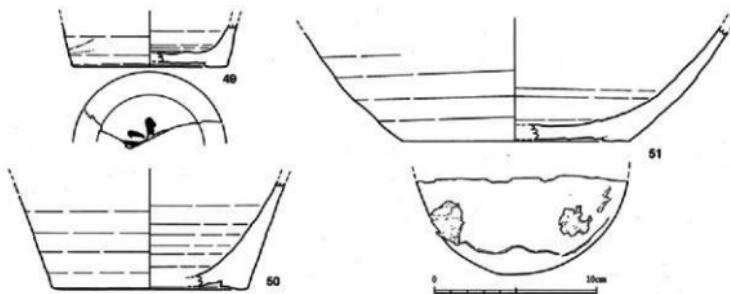
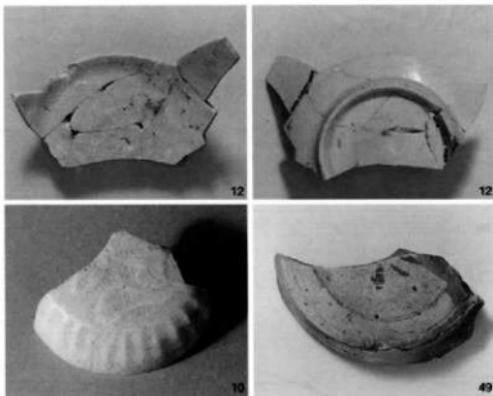


Fig. 58 353号邊構出土遺物実測図3 (1/3)



Ph. 62 353号邊構出土遺物

(4) その他の出土遺物

最後に、これまでの報告から漏れた遺構・包含層出土遺物で、注意を要すると思われるものについて、簡略に触れておく(Fig.59~60)。

弥生土器

1~4は、弥生時代前期の甕型土器である。緩く外反した口縁端部に、小さな刻み目を並べている。体部は、刷毛目調整である。外面には、厚く煤が付着している。

5~8は、外来系土器である。5・6は、山陰系土器であろう。小さく外反した頸部から、上下に張り出して、ほぼ垂直な口縁帯を作る。口縁帯には、平行沈線が巡る。胎土はやや粗いが、焼成は比較的堅く、暗灰褐色を呈する。外面から頸部内面までは横なで調整。体部内面は横方向のへら削りである。7・8は、畿内系の二重口縁壺である。胎土は白灰色で軟質、焼成も柔らかい。7は、口縁端部の小片で、外面は横なで、内面は横刷毛目調整する。外面には、工具による刺突が並ぶ。8は、頸部から口縁部にかかる部位の破片である。内外面とも、なで調整。若干垂れた口縁帯の下位に、円形浮文

が並ぶ。円形浮文の中央は、竹管で円形に刺突されている。7・8は、古墳時代前期にかかる遺物であろう。

9・10は、弥生時代中期の壺型土器である。9は、大きく外反した頸部から、粘土帯を貼り付けて、小さい鉄状口縁を作り出す。10は、丹塗磨研の壺型土器である。鉄状を呈する大きな口縁帶の上面から体部外面を、赤色塗彩する。口縁端面には、刃状工具を用いた刻み目が並んでいるが、工具は頸部下位にも当たっていたようで、口縁の刻み目と対応した位置に縦の薄い刃先痕が認められる。11は、後期の大型壺である。「く」字型に大きく外反した頸部から、端面を平坦に面取りして口縁を作る。内外面ともに刷毛目調整、口縁端面はなで調整する。

12は、庄内式土器の壺である。口縁部内面は刷毛目をなで消し、体部内面はへら削り、体部外面は平行叩き、口縁部外面は横なで調整する。

古代遺物

13は、須恵器の円面鏡である。小片のため細部は知り得ないが、透かし穴の一部が二ヵ所残っており、図のように復元した。ただし、遺存部位の制約から、透かし穴の大きさについては、推測に過ぎない。14・15は、墨書き須恵器である。高台壺の外底部に書かれている。文字と言うよりも、記号であろう。16～18は、墨書き土師器である。平底の壺の底部に、墨書きが残る。16の墨書きは、文字と思われるが判読できない。17は、「十」である。18は、部分的にしか残っていないが、「田」+「口」の二字形

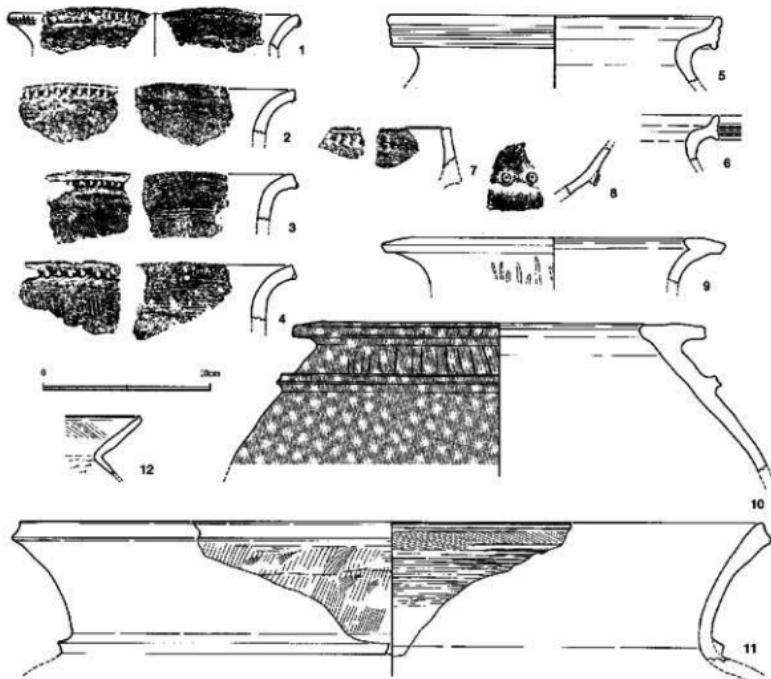


Fig.59 その他の出土遺物実測図1 (1/3)

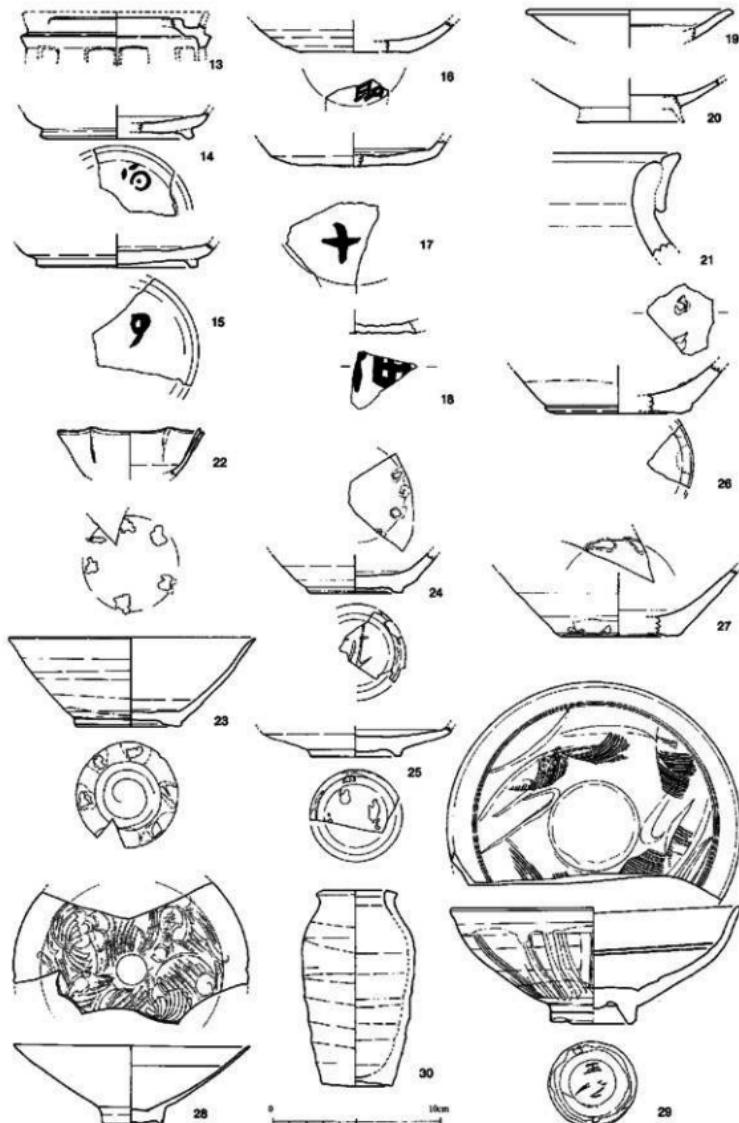


Fig.60 その他の出土遺物実測図2 (1/3)

であろう。

19・20は、緑釉陶器の皿である。暗灰色で須恵質の胎土に、濃緑色の釉がかかっている。釉には、ごま状の磨り斑が見られる。東濃産の緑釉陶器であろう。緑釉陶器では、この他狼投・周防・長門と思われる皿が出土している。

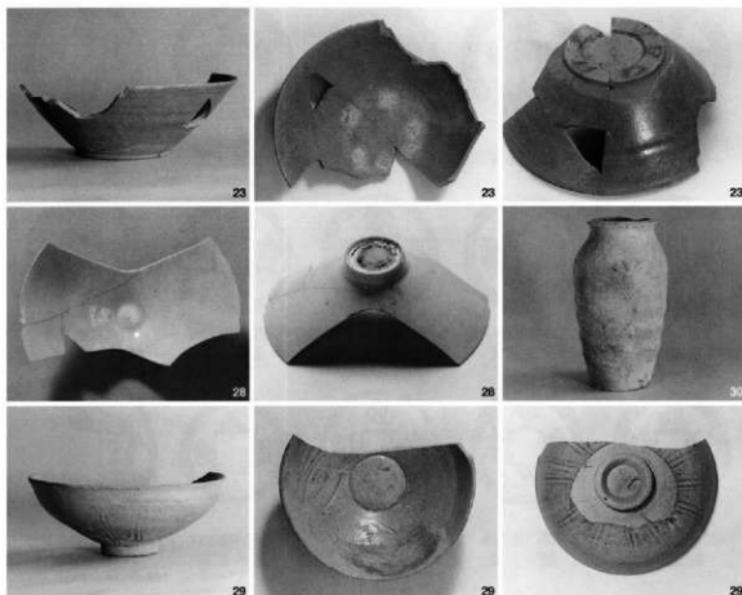
22～27は、越州窯系青磁である。22は、輪花の小瓶である。23は、玉壁高台の碗である。釉は高台際までかかり、豊付きと見込みには、6個の目痕が並ぶ。24は、輪高台の碗である。全面施釉後豊付きの釉を削り取る。見込みと豊付きに目痕が並ぶ。外底部には、施釉後にへら書きした陰刻文字が見られるが、判読できない。25は、輪高台の皿である。全面施釉で、高台の内側に目痕が見られる。26・27は、平底の碗である。体部下位から露胎となる。平底の端部と見込みには目痕が並ぶ。今回の発掘調査では、全部で32点の越州窯系青磁が出土した。また、図示していないが、初期白磁の皿が1点出土している。

中世国産陶器

21に示したのは、常滑焼きの壺である。大壺の口縁部で、N字状に折り返した口縁は、幅広の口縁帯となって頸部に貼りつく。常滑の編年では、8期(14世紀後半)とされるものである。博多遺跡群では、6・7期(13世紀後半～14世紀前半)の常滑はしばしば出土するが、8期以降は珍しい。

中世貿易陶器

28は、青白磁の碗である。薄手の精緻な作りで、施文も細かい。本調査地点からは、青白磁は、97点が出土している。碗・皿類が多く、合子・小壺がつづく。30は、褐釉陶器の瓶である。完形品だが、



Ph.63 その他の出土遺物

被熱し、釉表はあれている。29は、同安窯系青磁の碗である。高台内に、「王」十花押の墨書が見られる。墨書陶磁器としてここに取り上げた。本調査地点では、墨書陶磁器の出土は比較的少なく、18点にとどまっている。姓をあらわすものとしては、「王」・「孫」・「林」が各1点見られたにすぎない。花押を墨書したものも、3点が出土したのみで、他の調査地点に比べると少ないと言うことができそうである。

銅錢

銅錢は、全部で35枚が出土したに過ぎない。皇朝錢の「隆平永寶」を最古とするが、これは9世紀の054号遺構から出土したもので古代に属する。そのほか、「寛永通寶」(本邦、江戸時代)以外は、すべて宋錢であり、中世の流通錢である。無文錢や明らかに模鋳錢と見られる錢は含まれていなかった。その内訳は、第1表に示す。



Fig.64 出土銅錢

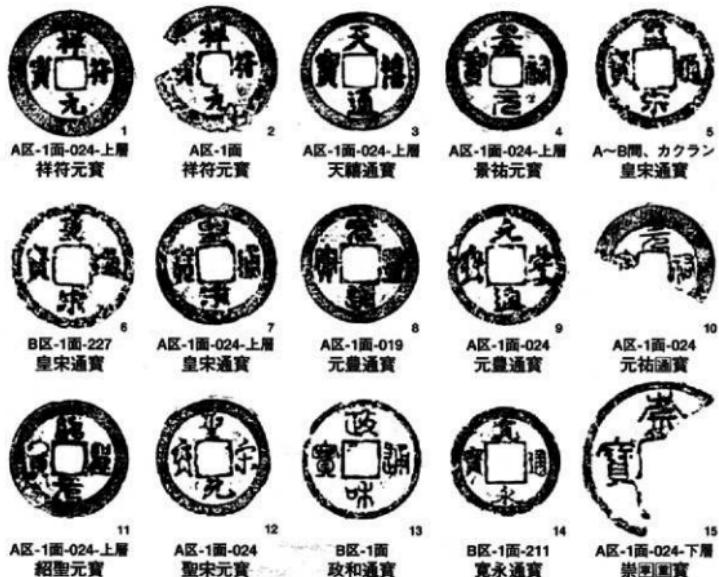


Fig.61 出土銅錢拓本 (1/1)

表1 出土銭貨一覧表

Fig.61	銭貨名	造構番号	初鑄年	年号	時代	径cm	厚cm	背面	字体	参考
8	元豊通寶	A区1面-019	1078	元豊元年	北宋	2.43	0.07	なし	篆	薄い、背面の輪なし
	元祐通寶	〃	1086	元祐元年	〃	2.43	0.10	〃	〃	薄い、輪の形跡のみ
	寛永通寶	A区1面-022	1636	寛永13年(江戸)	2.45	0.14	〃	真		古寛永、輪の形跡のみ
	寛永通寶	〃	〃	〃	2.48	0.08	〃	〃		新寛永、背面の輪なし、粗悪
9	元豊通寶	A区1面-024	1078	元豊元年	北宋	2.46	0.10	〃	行	
	(元)通(背)文	〃								
12	聖宋元寶	〃	1101	建中靖国元年	北宋	2.40	0.12	なし	行	
10	元祐(通)(背)文	〃	1086	元祐元年	〃	2.50	0.11		篆	元祐通寶と思われる
1	祥符元寶	A区1面-024上層	1009	大中祥符元年	北宋	2.57	0.09	なし	真	大きい、背面の輪も大きい
11	紹聖元寶	〃	1094	紹聖元年	〃	2.47	0.10	〃	篆	背面の輪にズレ
	(大宋)大寶	〃							篆	
3	天禧通寶	A区1面-024-上層②	1017	天禧元年	北宋	2.43	0.12	なし	真	3枚連-1、付着の跡か厚みがある
4	景祐元寶	〃	1034	景祐元年	〃	2.49	0.09	〃	篆	3枚連-2 輪なし
	熙寧元寶	〃	1068	熙寧元年	〃	2.40	0.07	〃	篆	3枚連-3
	至和元寶	〃	1054	至和元年	〃	2.39	0.13	不明	真	もうく、さび激しい、数値は確定ではない
7	皇宋通寶	〃	1038	寶元元年	〃	2.52	0.11	なし	真	怪が大きめではあるが薄い
	紹聖元寶	A区1面-024-上層③	1094	紹聖元年	〃	2.51	0.10	不明	篆	
	元豐通寶	A区1面-024-中層	1078	元豐元年	〃	2.50	0.11	なし	行	
	解説不能	〃				2.50	0.13	不明		
	(大宋)通(背)文	〃				〃		真		磨輪鉄か
	熙寧元寶	〃	1068	熙寧元年	北宋	2.35	0.15	〃	真	
	解説不能	〃				2.38	0.10	〃	不明	さび激しい、数値は確定ではない
	〃	〃				〃		〃	〃	
15	崇寧(重)宝	A区1面-024-下層	1103	崇寧2年	北宋				隶	崇寧重寶と思われる
	隆平永寶	A区2面-054	796	延暦15年	平安	2.52	0.13	なし	隶	皇朝十二錢
14	寛永通寶	A区1面-211			江戸	2.28	0.08	なし		孔が大きい
	二 錢	B区-1面218		近代錢	明治	3.10	0.21	有		
	解説不能	〃 219				2.42	0.11	不明	不明	
6	皇宋通寶	〃 227	1038	寶元元年	北宋	2.55	0.13	なし	真	
	熙寧元寶	B区-2面318	1068	熙寧元年	〃	2.31	0.13	なし	篆	
5	皇宋通寶	A-B開カクラン	1038	寶元元年	〃	2.45	0.12	なし	真	
2	祥符元寶	A区1面	1009	大中祥符元年	〃	2.57	0.09	なし	真	
	元豊通寶	〃	1078	元豊元年	〃	2.46	0.11	なし	篆	
13	政和通寶	B区 1 面	1111	政和元年	〃	2.47	0.13	なし	篆	背面にズレと文様と思われるものがある
	皇宋通寶	A区 2 面下	1038	寶元元年	〃	2.54	0.12	なし	真	

第三章　まとめ

本概要報告書を閉じるに当って、簡単なまとめを行ない、関連した問題点・課題について若干触れておきたい。

発掘調査の概要

博多遺跡群第118次調査地点は、博多遺跡群の南西部に位置し、13世紀以来存在が知られる櫛田神社の東側に接する。発掘調査では、弥生時代から14世紀前半、江戸時代の遺構・遺物が出土した。弥生時代・古墳時代では、竪穴住居跡と思われる遺構が数基あるが、後世の遺構に切られているため、はっきりとは確認できなかった。

奈良時代では、甕棺墓が1基當まれていた。また、柱穴状ピット(054号遺構)から、皇朝銭「隆平永寶」が出土している。

中世にはいると、11世紀後半頃から遺構・遺物が急増する。特に白磁碗・皿を廃棄した071号遺構や118号遺構などでは、質・量ともに見るべきものがある。

鎌倉時代の14世紀前半には、調査区を南北から北東に横切って浅い溝(024号遺構)が掘られている。この溝には、その廃絶にあたって、大量の土師器皿・壺が棄てられていた。

中世後半期の遺構・遺物は見られないが、江戸時代の18世紀以降、素焼き物の工房が営まれており、大型の廃棄土坑が多数据られている。

次に、今回の発掘調査で最も注目すべき遺構である024号遺構について、いくつかの観点から検討する。

024号遺構について

024号遺構は、これまで述べてきたように大量の土師器を廃棄した遺構である。これは、廃棄を目的として掘削した遺構ではなく、溝の廃絶時にそのくぼみを利用して廃棄したと考えられる。

同様な遺構は、博多遺跡群では、地下鉄店屋町工区A・B区の1号溝、2号溝において調査されている。両遺構とも、古代に遡る大型の溝が埋まっていた過程で、まだ埋まりきらずに残っていたくぼみに土師器を廃棄したものである。024号遺構との違いは、024号遺構は浅い溝で、ほとんど埋まっている状態で土師器の廃棄が始まったと言う点である。すなわち、024号遺構は廃棄の年代から余りさか上らない時期に掘削されたと言う事ができそうである。

また、地下鉄店屋町工区A・B区の1号溝、2号溝のかわらけ溜りは、14世紀前半と報告されている。この点は024号遺構の年代観と一致している点に留意したい。

024号遺構出土の土師器皿について

024号遺構からは、コンテナケースにして115箱分の土師器皿が出土した。1箱に20kgの遺物が入っていると仮定すれば、約2.3tもの重量になる。出土状況については本文中に詳述したので重複を避けるが、きわめて短期間に廃棄されたものであり、ほとんど一括資料と言っても過言ではないと思われる。

これらの土師器皿を通観すると、壺・皿それぞれに3タイプがあることに気づく(本文参照)。さらに大縦把に見ても、極端に小さい皿と、通常の皿、通常の壺と、極端に大きい壺という、4種の構成は明瞭である。これらが機能的に分化した結果であるのか否かは、現時点では不明である。しかし、

構成の多様さと、個々のタイプ内での法量のばらつきなどを見ると、もっぱら法量の計測値に依存した現行の編年姿勢に対して、危惧を感じざるを得ない。同様の構成は、219号遺構や221号遺構において認められるもので、今後検討を加えなくてはならない課題である。

黄釉磁器小皿について

024号遺構中層から、黄釉磁器小皿10枚が重なって出土した。これは交趾として知られる、翡翠釉の小皿と釉色は異なるが同タイプである。このタイプの小皿は、これまで出土例はあるが、いずれも16世紀代の遺構からの出土である。そこで、本文とは重複するが、024号遺構からの出土状況を今一度確認して置きたい。

出土位置は、中層の土師器群の縁辺部に当たる。決して土師器群の直中ではなく、むしろ土師器分布からははずれていると言える。しかし、Ph.8に示したように、黄釉磁器と重なるように中層の土師器片が散らばっている。これらの点からは、中層土師器の分布の中心からはずれてはいるが、土師器と共に共存していると言う事ができる。

一方、否定的に解釈するならば、この部分に後世になって掘り込みがなされ、黄釉磁器を埋納した際、付近に埋もれていた土師器片を巻き込んで、これが埋土に混入したと言う事にならうか。

発掘調査段階でも後者の可能性を考えて精査したのだが、埋土の上からは、上層からの掘り込みの確認はできなかった。周辺の発掘調査地点を含めて、博多浜の南辺一帯は、中世後半期の遺構・遺物が出土しないという状況があり、本調査でも15・16世紀の遺構・遺物が全く見られなかった点も考慮しなくてはならないだろう。すなわち、発掘調査時の所見からは、後世の埋納とすることには消極的にならざるを得ないのである。

専修大学の亀井明徳氏のご教示によれば、翡翠釉磁器は大型品の出土例で元代まで遡るものはあるが、今回のような小型品は、常識的には15世紀以降であろうとのことであった。

結局、ここではなんら結論めいたものは出せないのだが、如上の出土状況を強調した上で、今後の出土例による判断を待ちたい。

118次調査地点と鎮西探題館

土師器壺・皿=かわらけは、中世においては、一回限りの使い捨ての器とされることが多い。筆者は以前、博多遺跡群出土のかわらけを論じた中で、西日本においてはかわらけは日常の器であり決して特殊な存在ではなかったこと、ただし、儀礼の場・饗宴に用いられた場合にのみ、その場限りで廃棄されたものと考えた。そして、明らかに饗宴に伴う大量廃棄の例として、溝上面への廃棄をあげたのである。さらに、13世紀後半から14世紀前半に比定されるかわらけ集中廃棄例が多く、廃棄された量も最も多數になっていることから、鎮西探題設置による鎌倉的饗宴の一時的導入による影響を想定した。基本的にこの意見を変えるつもりはなく、本稿の最後に第118次発掘調査地点と鎮西探題館との関係について触れておきたい。

鎮西探題の位置と構造については、九州大学の佐伯弘次氏の研究がある。それによると、鎮西探題館は、博多の櫛田神社近くにあり、記録に残る限りで、南門・東門・奉行所・文庫・壺・馬場などを備えていたことが明らかとなった。

元弘3年(1333)肥後の菊池武時は博多の鎮西探題館を襲撃した。ちょうどその時博多の聖福寺に寄宿していた京都東福寺の僧良覚が記した「博多日記」という紙背文書がある。佐伯氏の研究と重なるが、「博多日記」から鎮西探題の所在を探ってみたい。

正慶二年(1332)

三月十一日 肥後国菊池二郎入道寂阿博多に到着

- 十二日 鎌西探題に出仕、侍所下廣田新左衛門尉と口論となる
- 十三日 (寅時) 菊池武時、「博多中所々ニ付火焼払」
菊池武時、少式貞経・大友貞宗に使者を立て、味方に誘う
「筑後入道殿ハ堅精ニテ此使二人々ヲ切、十三日夕方被進匠作方」
「江州ハ可打止之由、被仰之間、被使逐電畢」
菊池武時、「松原口辻堂ヨリ御所ニ押寄之所、辻堂ノ在家ニ火付タル間、
不及押寄シテ、早良小路ヲ下リニタメイテ懸」「櫛田浜口ニ打出」
少式氏延候人聲場兵庫允、菊池の陣に向かい子網を尋ねようとして討たれる
武藏四郎、武田八郎以下「相向息浜、菊池宿之處、早ク菊池打出タル間、
息浜ノスサキヨリ廻テ、櫛田浜口ニ菊池引ヘタル處ニ追懸タリ、即及合戦」
菊池軍、探題御所に押し寄せ、合戦に及ぶ
「白櫛田浜口打入櫛田宮、此ハ御所カト云テ、二三反宮ヲ打廻」
「サテ御所ニハ大手寄タルカト、人ヲ以テミセケレハ、使走返テ、
サル事モ候ハスト申シケレハ、腹ヲ立テ、御所ニ押寄ケリ」
菊池武時、子息三郎は犬射馬場で討死、舍弟覚勝は御所の壇庭で討死
合戦終わって、少式貞経・大友貞宗以下鎌西の武士連、探題御所に参る
菊池勢の首を犬射馬場に懸ける

以上が、菊池武時による探題館襲撃の顛末である。武時は、博多の「息浜」の宿館から東に一旦博多から出て、博多の東辺を南下し、南東角である「松原口」から博多に入ろうとした。しかし、自軍が放った火炎のため入れず、さらに博多の南辺に沿って住吉に出、博多の南西角から「櫛田浜口」に侵入したのである。そして「御所」=探題館と間違えて櫛田神社に攻め入ったという。

菊池が一旦博多の外に出たのは、自軍と合流するためであったろう。おそらく博多市中には、数百もの軍勢を駐屯させる場所はなかったと思われる。事実、この時少式貞経は、博多の南東の堅粕に陣を張っていたのである。菊池も、わずかな家の子を率いて息浜の宿館に入ったものの、ほとんどの軍勢を博多の東の松原に置いていたに違いない。さて、松原口辻堂から探題館を襲おうとしたと言うことは、探題館は博多の南辺に近い位置にあった事を示している。また、探題館と間違えて櫛田神社に侵入したのであるから、櫛田神社と探題館はすぐ間近であったこと、進軍経路から言って櫛田浜口一櫛田神社一探題館の順で並んでいたと考えられる。探題館は博多の南辺付近にあったと思われるから、櫛田神社の東に探題館が位置したと見て大過ないだろう。櫛田神社が現在の位置を動いていないとすれば、探題館はまさに第118次調査地点付近に比定されるのである。

もし上の推論が的を射たものであったなら、第118次調査の024号遺構は、にわかにその存在感を増してくるだろう。「博多日記」によれば、この後連日のように九州の御家人連が探題館に着到し、諸方に出陣している。その都度、武家儀礼が繰り返されたとしたら、そこには多量のかわらけが……。

いさか、想像が先走ってしまったようである。未だ、発掘調査で探題館の確たる証拠を得たわけではない。この続きは、周辺の発掘調査で更なる手がかりを得る時まで、控えることとする。

大庭康暉 1999 「博多かわらけ考1—十師器皿—括庵叢書構を中心に—」『博多研究会誌』第7号
佐伯弘次 1992 「鎌西探題館の位置と構造—文獻史料から見た—」『博多研究会誌』第1号

博多 75

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第666集

平成13年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 さつま印刷株
福岡市博多区吉塚1丁目9-7

